

言語行動の発達(III)

母子相互作用と象徴遊び (2 から 23 か月児の擬似縦断資料の分析)

教育心理学研究室 荻野美佐子・大浜幾久子・辰野 俊子
斉藤こずゑ・武井 澄江

The Development of Verbal Behaviour (III)

Mother-Infant Interaction and Symbolic Play; A quasi-longitudinal
study of infants from 2 to 23 months old.

Misako OGINO, Kikuko OHAMA, Toshiko TATSUNO,
Kozue SAITO and Sumie TAKEI

The nature of mother-infant interaction in play situation was explored in a quasi-longitudinal study of 20 mother-infant dyads. Eight infants for months 2-5, four infants for months 6-11, four infants for months 12-17 and four infants for months 18-23 and their mothers were observed once a fortnight at their home. Data of 149 semi-structured play sessions with a variety of toys were analyzed. In the present paper, the analysis focused not only on the functions (initiative or responsive) and types of behaviour (gestural or vocal) but also on the levels of infant's and mother's play, of which the symbolic play level was the highest. A comparison between infant's play level and mother's play level at every two months of age revealed that the development of infant's play interacted with mother's play behaviour. During the first several months of our observation period, while infant's play was classified only to lower levels, mother's play was quite often classified into higher levels including symbolic play level. However, as infant's play behaviour progressed, mother's play levels became more correspondent to infant's play levels. As for symbolic play of infant, it was observed after 8 or 9 months of age in gestural and vocal mode, but it was only after 20 months of age that symbolic play became frequent and accompanied also frequently language expressions. It was suggested that the nature of mother-infant interaction in play changed around 20 months of age and that this was essentially due to the development of infant language with symbolic play.

I. 問 題

我々の一連の研究の目的は、母子間の前言語的コミュニケーションが、こどもの言語習得にどのように関連しているかを明らかにすること、及び子どもの言語習得が、その後の母子間コミュニケーションをどのように変えていくのか、その発達の過程を明らかにすることである。本論文では前報(辰野他, 1980)にひきつづき、遊び場面における玩具を媒介とした母子相互作用の分析をす

める。

本論文では、象徴遊びに至る子どもの遊びのレベルの発達と、母子相互作用との係わりに関する分析をする。そのために、前報の2か月から17か月児の擬似縦断資料に、18か月から23か月児の資料を追加した。

象徴遊びの発達の研究は、言語の記号的ないし象徴的機能の側面を重視する立場(Piaget et al., 1966)から多くなされてきた。Inhelder et al. (1972)は、子どもの物を用いた遊び行動を生後10か月から縦断的に観察して、生後18か月以前と以後の子どもの対物行動に次の

ような発達的变化を見出した。すなわち、おおよそ 18 か月までの感覚運動段階の後期には、活動のシエマと、とり扱う物の関係が未分化な時期 (10~12 か月) から、ある活動のシエマはある種の物にしか適用されなくなる、分化の始まりの時期 (12~14 か月) を経て、分化が次第にすすみ、最後には、物はその慣習的な通常の用いられ方をするようになる (14~18 か月)。おおよそ 18 か月以降の次の段階では、一定の場面で、活動のシエマと対象のシエマが組織化されるようになり、ひきつづいて、存在しないものの代用として他の物が用いられるようになる。すなわち、象徴遊びが始まる。このように感覚運動期に *actes signifiants* (有意活動) が形成されることにより、記号的機能の出現が可能になると考えられ、記号的機能の最も複雑なものであるとみなされる言語の出現も、感覚運動期のこの発達が条件であると考えられている。

Nicolich (1975) は、Piaget (1946) の観察を発展させ、9 か月から 24 か月児の遊びを母子場面の縦断観察の VTR データ分析により細かく分類した。そこでは感覚運動段階後期から象徴段階にいたる象徴遊びが大きく 5 水準に分けられている。Bates (1979) も、独自のデータと Nicolich のデータを比較検討して、やはり象徴遊びの 5 水準を設けている。

我々の研究では、象徴遊びに至る遊びの発達レベルばかりでなく、言語のもつコミュニケーション機能の先駆と考えられる前言語的母子相互作用の性質とをあわせて考察していく。すなわち、言語の記号的機能とコミュニケーション機能の両側面の前提となると考えられる前言語期の母子の物を媒介とした遊び場面の分析を中心に、子どもの象徴遊びと言語の出現が母子相互作用の性質をどのように変えていくかをみていこうとするものである。

象徴遊びに至る遊びの発達は、主に Inhelder et al. (1972) の結果をもとにして、I. 消極的遊び、II. 物を自分の身体にもっていく遊び、III. 物のとり扱い、IV. 物の慣習的な用いられ方、すなわち物の機能に即した遊び、V. 象徴遊び、の 5 レベルに大きく分類する。我々は、上述の子どもの遊びレベルの分類を動作と言語 (発声) に分けて行う。分析の対象には、言語出現以前のごく初期の子どもの遊びも含まれるのであるから、動作と言語による遊びレベルのちがいは当然予想される。したがって Bates (1979) が指摘したような象徴遊び出現前後の遊びにおける動作と言語の発達レベルの並行性を検討しなおし、また、動作と言語とのずれを明らかにしていく。さらに子どもの遊び行動だけでなく母親の行動について

も、動作と言語に分けて同様の遊びレベルの分類をする。

母子相互作用の性質については、追加した 18 か月以後の資料について、前報と同様に、相互作用を開始する行動と、それへの応答行動の機能レベルの変化を母子に分けて分析する。

先に述べた遊びレベルの分類は、この母子の相互作用の開始行動と応答行動の逐一につきなされることになる。その際、自分自身の遊びのレベルと相手に求める遊びのレベルの両方を決定する。

以上の分析データは子どもの月齢による発達の変化、対応する時期の母親の変化を中心にまとめ、遊びレベルと相互作用開始行動・相互作用応答行動、自分の遊びのレベルと相手に求める遊びレベル、さらに遊びレベルと動作・言語 (発声) の関連について考察をしていく。

II. 方 法

A. 分析資料

表 1 に示された 2~23 か月の 4 グループ計 20 名の子どもの家庭における母子行動の観察資料から、観察者の持参する所定の玩具 [人形 (男・女)、ウサギぬいぐるみ、イヌ (ビニール製・押すとなく)、自動車 (ゼンマイで向きを変えながら走る)、歯ブラシ (幼児用)、鏡とブラシ (ビニールケース入り)、旅行用化粧品入れ (3 個・ビニ

表 1. 分析資料の構成

月 齢	被 験 児	観察セッション数
2・3か月	第 1 グループ 男 4 女 4	12 (2か月: 4, 3か月: 8)
4・5か月		25 (4か月: 12, 5か月: 13)
6・7か月	第 2 グループ 男 2 女 2	13 (6か月: 7, 7か月: 6)
8・9か月		19 (8か月: 10, 9か月: 9)
10・11か月	第 3 グループ 男 2 女 2	14 (10か月: 7, 11か月: 7)
12・13か月		11 (12か月: 3, 13か月: 8)
14・15か月		15 (14か月: 8, 15か月: 7)
16・17か月	第 4 グループ 男 2 女 2	16 (16か月: 8, 17か月: 8)
18・19か月		8 (18か月: 4, 19か月: 4)
20・21か月		8 (20か月: 4, 21か月: 4)
22・23か月		8 (22か月: 4, 23か月: 4)
	計	149 セッション

ール及びプラスチック製でフタつき), ガラガラとニギニギ(ビニールケース入り), コップ, 皿, 茶わん, はし, スプーン, 積木(16個), 棒 (I字形とY字形の木の枝)]を用いた10分間(1セッション)のゆるい統制母子遊び場面を2か月毎の11月齢について, 149セッション抽出する。月齢毎の分析セッション数は表1に示してある。

記録は, 母子の動作(行動)・ことば・発声・視線を, 特に, その相互関係をもらさないように留意した, 逐一筆記記録法によるものである。この参加観察による記録を, 観察終了後, VTR 録画で詳細に補完したものを資料として分析する。

B. 分析方法

1. 相互作用行動

分析に用いる筆記記録では, 母親と子どもの行動について, 文脈から同時的, 継時的にひとまとまりとなる複合的なものも含めて, 相互作用を持つ行動を矢印で結んである。この矢印で結ばれた相互作用を持つ行動を相互作用行動と呼ぶ。今回は, 玩具を媒介としない相互作用については分析から除いている。

2. 相互作用機能レベル

相互作用行動を次の機能レベルに分類する。

a. Initiative 行動 (以後 Ini 行動と呼ぶ)

相互作用の開始行動を, 相手に対する働きかけの強さから, 次の4つのレベルに分ける。

- a (一人遊び): 相手に働きかける意図のない一人遊びのうち, 相手がそれに刺激されて反応したもの。
- b (提示行動): 玩具と自分の関係を相手に注目させる。相手と意識した玩具での遊び。
- c (働きかけ要求): 相手が特定玩具に何らかの働きかけをすることを求めるもの。働きかけの内容は特に指定せず, 相手の自発性にまかせる (ただし, 見るところ以上の働きかけを求めている)。
- d (特定行動要求): 相手が特定玩具に特定の行動で働きかけをすることを求めるもの。

b. Responsive 行動 (以後 Res 行動と呼ぶ)

Ini 行動に対する応答行動を, 相手の働きかけに対する受容の強さから, 次の4つのレベルに分ける。

- w (無視, 禁止, 拒否): 相手の Ini 行動に気づかず他に何のこともしていたり(無視), 積極的に阻止する(禁止, 拒否)もの。これらの行動は, 相互作用の終結を示すものと考え。
- x (受動的受容): 相手の Ini 行動のレベルに関わらず,

自分から玩具に働きかけることをせず, 相手と玩具(または玩具のみ)に注目するもの。

y (能動的受容): 相手の Ini 行動のレベルに関わらないが, 相手の行動の内容には密接であり, 相手の Ini 行動を受容しつつ, 積極的に自分から玩具に働きかけるもの。

z (解釈・展開): 相手の Ini 行動のレベルに関わらず, 相手の行動から特定意図を主観的に推測して言語化したりするもの(解釈), または相手の要求と関連はしているが, 要求通りの行動をするのではなく, 自発的に玩具に別な働きかけをするもの(展開)。

以上の機能レベルの分類は, かなり文脈依存的に決定される。また, 連続する相互作用の場合, 同一相互作用行動が, Ini 機能と Res 機能の2つの機能レベルに分類される。

3. 相互作用遊びレベル

相互作用の Ini 行動, Res 行動として行われる遊び行動を次の遊びのレベルに分類する。

- I レベル: 消極的な遊び——玩具を見るだけ, 相手にされるまま, など。
- II レベル: 物を自分自身にもっていく遊び——玩具をなめる, 玩具でからだの一部をこする, など。
- III レベル: 物をとり扱う遊び——ひとつまたはそれ以上の玩具を扱う。玩具をさし出す, 受けとる, たたきあわせる, など。
- IV レベル: 物の機能に即した遊び——一連の活動で用いられる玩具をまとめておく。さらに, より物の機能に即した, 積木を積む, 自動車のネジを巻く, など。
- V レベル: 象徴遊び——玩具を用いた象徴遊び。人形に茶わんとはして食べさせるまねをする, など。

なお, このうち I~III レベルの活動は解釈不可能であり, IV レベルは一部解釈可能, V レベルは解釈可能と考えられる。

遊び行動においては, たとえば「積んでごらん」と相手に積木を渡すというように, ひとつの行動でも, 言語と動作, 自分のやっていることと相手に関することとで遊びレベルが異なることが多い。そこで, 辰野他(1980)における行動形式の①(視線), ④(動作)を動作(LA)とし, ⑤(発声)を言語(V)とし, それらについて, 自分と相手に関するものを分けて遊びのレベルをつける。これらの定義は以下の通りである。

LA [自分]: 自分自身が直接物に働きかける動作 (ガラガラをもって振る, はしで食べるまねをする, など)。

表 2. 遊びレベルの例

遊びレベル	動	作	言	語
I	<ul style="list-style-type: none"> ○見るだけの活動 ○能動的でない活動 	<ul style="list-style-type: none"> ○玩具を注視する。 ○玩具を追視する。 ○玩具を落とす。 ○玩具に触れる。 ○相手にされるまま、玩具を持ったたり、玩具を用いた動作をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「見てください」 ○「見てるのね」 	
II	<ul style="list-style-type: none"> ○玩具を自分自身にもっていく活動 	<ul style="list-style-type: none"> ○玩具をなめる、口にいれる。 ○玩具を自分の顔、胸、ひざなどにつける、こする、のせるなど。 ○玩具にばくぜんと手をのばす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「なめちゃうの」 ○「かじっちゃった」 	
III	<ul style="list-style-type: none"> ○ひとつの玩具を扱う活動 ○二つの玩具を扱う活動 ○その他 	<ul style="list-style-type: none"> ○玩具を持つ、とる、置く。 ○玩具を押す(自動車を除く)、たたく、振り(ガラガラ、ニギニギは除く)、放る、くずす。 ○玩具をさし出す、うけとる。 ○玩具を立てる、まわす。 ○玩具をたたきあわせる。 ○玩具を他の玩具の上下、左右、前後に置く。 ○玩具を指さす。 ○玩具を探索する(二つの玩具を見比べるなど)。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「持てたわね」 ○「ちょうだい」 	
IV	<ul style="list-style-type: none"> ○一連の活動で用いられる玩具をまとめておく活動 ○玩具を用いた延滞模倣、慣用的性格をもつ活動 ○玩具を操作する活動 ○その他 	<ul style="list-style-type: none"> ○茶わん、はし、皿、コップ、さじをまとめておく(食事)。 ○コップ、歯ブラシをまとめておく(洗面)。 ○人形、動物をまとめておく。 ○ブラッシングで自分の髪をとかす。 ○歯ブラシで自分の口にいれまねをする。 ○コップで飲むまねをする。 ○茶わん、はしで食べるまねをする。 ○積木を積み。 ○ガラガラ、ニギニギを振る。 ○自動車のネジを巻く、自動車を押して走らせる。 ○棒などで他の玩具を手前にひきよせる。 ○フタつき容器のフタをまわしてあける、しめる。 ○人形の帽子や洋服の着脱をする。 ○犬を押してならす。 ○歯ブラシで髪をとかす(玩具を用途的に使用しているが、使い方が慣習的でない)。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「積木、積んでごらん」 ○「車のネジを巻いてあげよう」 ○「お人形さんにお帽子かぶせてあげて」 	
V	<ul style="list-style-type: none"> ○象徴遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ○人形に茶わんとはして食べさせる。 ○人形や動物をブラッシングでとるかす。 ○フタつき容器を薬びんにみたて、容器から薬を手につけ、自分や人形につける。 ○積木でトンネルを作る。 ○棒をはしにみたてる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「お人形さん、もうおなかいっぱい」 ○「キレイキレイしてあげてるのね」 	

LA [相手]: 相手の遊びを求める動作 (玩具を提示して見ることを求める, 相手に玩具をもたせる, など)。

V [自分]: 自分の遊びに関する言語 (自分自身の遊びの言語化, その時点で行っていない行動の言語化も含む。ガラガラを振りながら, 「ガラガラ」「車動かしてみようか」など)。

V [相手]: 相手の遊びに関する言語 (「車動かしてごらん」などの言語による要求, 食べるまねをしている相手に「そう, おいしいの」など相手の遊びの言語化)。

ただし, 各行動がすべてこの4側面をもっているとは限らない。「積んでごらん」と相手に積み木を渡す例でいえば, LA [自分] は積み木を渡すことでⅢレベル, LA [相手] は相手にとらせることでⅢレベル, V [相手] は「積んでごらん」という言語でⅣレベル, なお, V [自分] に相当する行動はない。また, 遊び行動の言語 (発声) には, I~Vレベルの遊びレベルに分類することのできない遊びに直接関係しないものがあり, それらは以下のように分類される (下線部が該当する部分)。

- ① wh-疑問 (相手が玩具をさがしているのを見て「何がほしいの?」)
- ② wh-疑問以外の疑問 (男の人形と女の人形を交互にさし出し「これがいいかな, こっちがいいかな?」)
- ③ 命名 (自動車を子どもが指さしているのを見て「それ自動車よ」)
- ④ 注意喚起 (「はら!」といい犬をならして示す)
- ⑤ 判断・解釈 (相手の遊びに対する判断・解釈: 相手が人形をつかんでいるのを見て「それ大好きなのね」)
- ⑥ あいづち (聞き返し, かけ声, 生返事など, 相手が自動車のネジを巻き, 自分の方を見たのに対し, 「ン?」)
- ⑦ 玩具に関する主観的説明 (自動車を示しながら「車カッコいいね」)
- ⑧ 模倣 (犬のシッポの部分を指さし「シッポ」というと「シッポ」とまねする)
- ⑨ 喃語のほか (①~⑧に分類できない発声: 喃語や意味不明の発声)

要するに, ひとつの遊び行動は LA [自分], LA [相手], V [自分], V [相手] の4側面のそれぞれについて I から V の遊びレベルに, また遊びに直接関係しない言語について, ①~⑨に分類される。遊びの各レベルの具体例は

表2に示す。

4. 相互作用ユニット

Ini 行動と Res 行動を矢印で結ぶ (ただし, Res 行動が「無視」の場合は, 矢印を2分の1の長さにする)。矢印の長さに関わらず, 1つの矢印で結ばれた2つの行動を相互作用対と呼ぶ。

Res 行動が次の行動の Ini 行動としての機能を担っていない場合, 最初の Ini 行動からその Res 行動までを1つの相互作用ユニットとする。したがって, 1つの相互作用ユニットは, 連続する複数の相互作用対から成りうる。それらの長さをボタンとし, 表3に示したようにボタン1から3を短ボタン, 4以上を長ボタンと呼ぶ (表3参照)。

表3. 相互作用ユニットのボタン

ボタン		Mini	Cini
短 ボ タ ン	1.		
	2.		
	3.		
長 ボ タ ン	4.		
	5.		
	ボタン6 以下同様		

5. 遊びユニット

玩具による遊び方の変化に応じて, 一連の相互作用ユニットをひとまとめにし, それを遊びユニットと呼ぶ。

同一玩具を用いても遊び方がかなり変化する場合は, 異なる遊びユニットとする。また, 違う玩具を導入しても遊び方が連続的で同一とみなされる場合は, 同一の遊びユニットとする。

III. 結 果

A. 遊びの相互作用

1. 遊びユニット

1セッション(10分間)中の遊びユニット数の月齢グループごとの平均を図1に示す。8・9か月で遊びユニット数が急増し、15を越えるが、18・19か月以降は再び減少する。これに対応して、ひとつの遊びユニットを構成する相互作用ユニット数はU字型の増減を示し、8・9月から16・17か月では3.0~4.4であるが、この前後の月齢では5.8~8.7となっている(図2)。低月齢及び高月齢で遊びユニット数が少なく、ひとつの遊びユニットを構成する相互作用ユニット数が多い理由としては、次のようなことが考えられる。すなわち、ひとつに

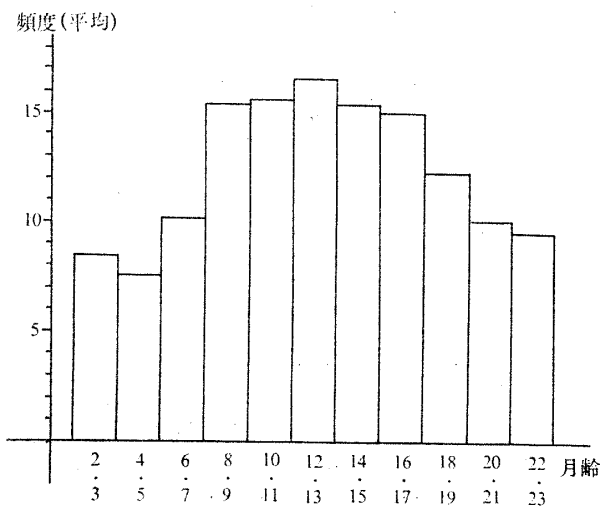


図1. セッションあたりの遊びユニット数

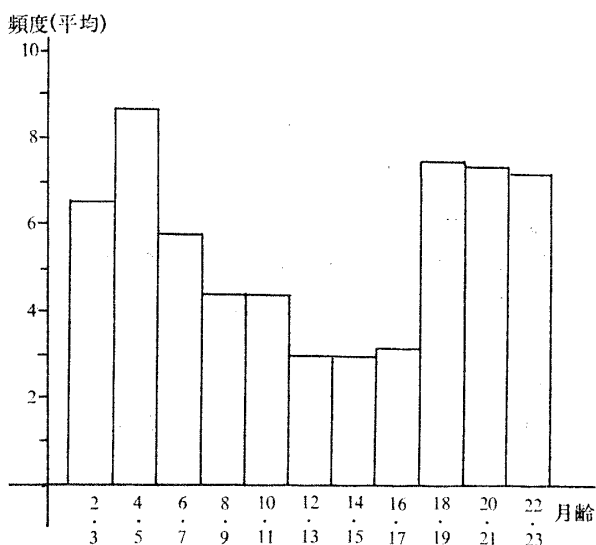


図2. 遊びユニットを構成する相互作用ユニットの数

は、特定の玩具を用いた単純な遊びが母子間で反復されるため、別の可能性としては、特定の目的のもとに構造化された遊びが母子の共同によって行われる、又は、複数の玩具を用いた遊びが特定のテーマのもとに母子の間で次々に発展していくため、遊びユニットの区切れがつきにくいといったことが考えられるのであろう。低月齢と高月齢の遊びユニット数とひとつの遊びユニットを構成する相互作用ユニット数の類似した傾向は、質的には異なるものであると考えるのが妥当であろう。この点については、遊びレベルの分析により明らかにしていく。

2. 相互作用ユニット

a. 相互作用の数

1セッションあたりの相互作用ユニット数の変化をみると、18・19か月で急増している(図3)。同じ図に示した、相互作用の絶対量を示すと考えられる相互作用対の数でも、同様に18・19か月で著しく増加し、22・23か月まで1セッション平均100を越えている。相互作用の量としては18・19か月以降は、それ以前の月齢に比べかなり増えているといえる。

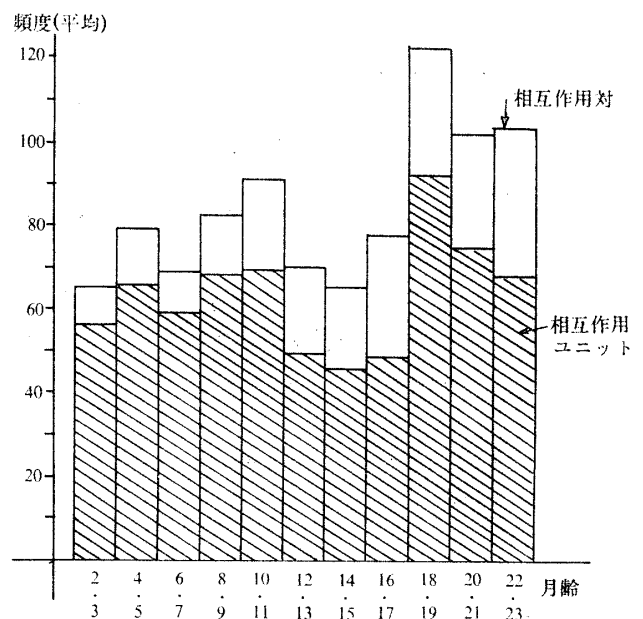


図3. 1セッションあたりの相互作用ユニットと相互作用対の数

b. 長パタンの数

本来の意味での相互作用の成立と考えられる、Ini と Res の役割交替のあるパタン4以上(長パタン)の数を図4に示す。このような相互作用の質を表わすものにおいては、月齢に伴って増加し、2・3か月では6.8だが、

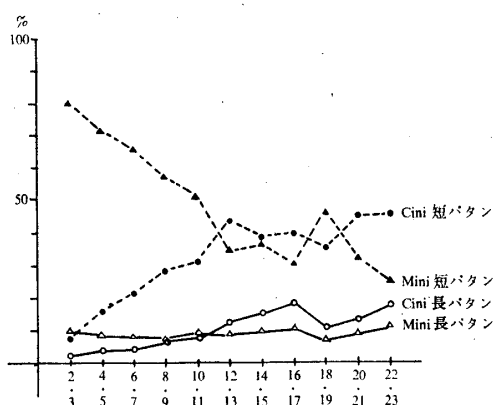


図 4. 1 セッションあたりの長パターン (パターン 4 以上) の相互作用ユニットの数

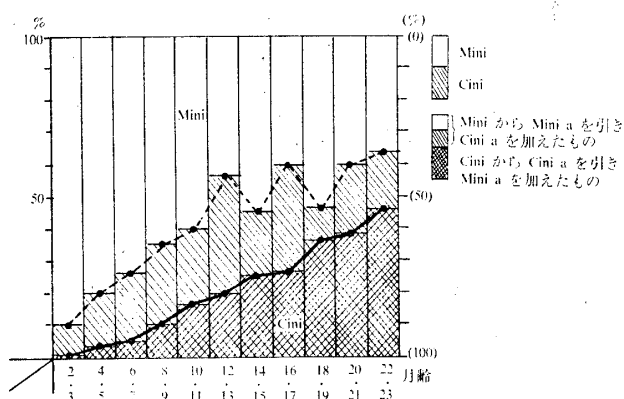


図 5. Cini で始まる相互作用ユニットと Mini で始まるユニットの割合

16・17 か月ではその約 2 倍, 22・23 か月では 2・3 か月の約 3 倍となっている。

c. 相互作用の成立

相互作用のきっかけを作っているのが母親である (Mini) か, 子どもである (Cini) かを図 5 に示す。各月齢の相互作用ユニットを 100 とした場合の Cini の占める場合は, 図中の斜線で示されているが, Cini は 12・13 か月まで漸増し, 以後多少の増減はあるものの 50% 前後を占めるようになる。Ini 行動の中には, 機能レベル a から d まで含まれているが, レベル a は一人遊びであるため, 積極的な相手への Ini 行動ではない。レベル a が相互作用のきっかけとなったということは, 相手側が一人遊びを積極的に受けとめて相互作用を開始したものともいえる。そこで, 各々の Ini 行動の中からレベル a のものを引き, 相手のレベル a を加えたものを計算し, 割合を求めて, 図 5 に格子で示した。積極的な Mini は, 2・3 か月では 99% であり, この頃の相互作用の開始において母親が大きな役割を果たしていることがわかる。しかし, 月齢に伴って積極的な Cini の割合は増加

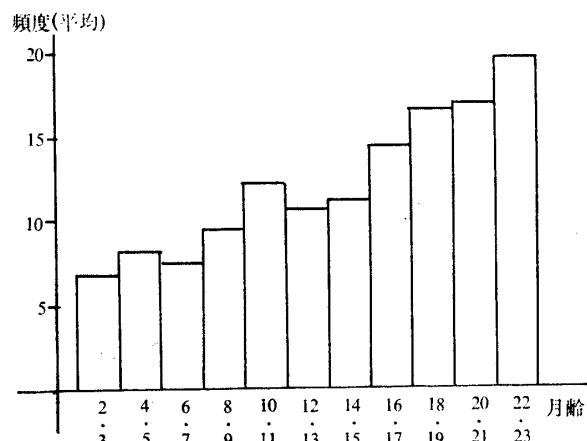


図 6. 相互作用ユニットのパターン (長・短) と Ini (M・C) の割合

し, 22・23 か月では 46% に達する。この月齢では, 子どもと母親とが同程度に積極的に相互作用の開始にかかわるようになるといえよう。

相互作用ユニットを長パターン (パターン 4 以上) と短パターン (パターン 3 以下) に分け, それぞれをさらに Min と Cini とに分けて, 相互作用ユニット総数に対する各々の割合の変化を図 6 に示した。長パターン・Mini は月齢に関係なくほぼ一定であり, 短パターン・Mini は月齢に伴って減少する。これに対し, Cini はパターンの長短にかかわらず, 2・3 か月から漸増している。特に 12・13 か月以降は, 長パターン, 短パターンともに Cini が Mini を上まわるようになる。このことから子どもが単に相互作用の開始者となる割合が増加するのみならず, 長く連続する相互作用のきっかけをつくることにおいても子どもが寄与するようになってくるといえるであろう。

3. 機能レベル

Ini 行動, Res 行動の機能レベルに関する分析結果を子ども, 母親別に示し, 月齢に伴う機能レベルの変化をみていく。

v. Ini 行動の機能レベル

全 Cini 行動を 100 とし各機能レベルの月齢に伴う変化をグラフにしたのが図 7 である。16・17 か月までは $a > b > c > d$ の順であり, 働きかけの弱い行動ほど多いという傾向があるが, 18・19 か月以降はレベル b, d が著しく増加し, $b > a > d > c$ の順となる。子どもの一人遊びがきっかけとなって相互作用が開始されることは, 月齢とともに減少し, 2・3 か月で 89% を占めていたレベル a は, 22・23 か月では 25% となる。子どもの側からの能動的な相互作用の開始は, 弱い働きかけであるレベル b が 8・9, 10・11 か月で増え, さらに 18・19 か月でも増加し, レベル a を上まわるようになる。レベル

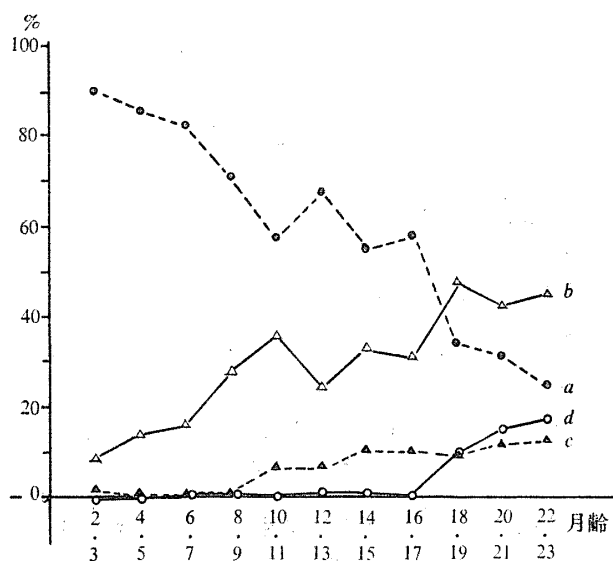


図 7. Cini における各機能レベルの割合
(全 Cini を 100 とする)

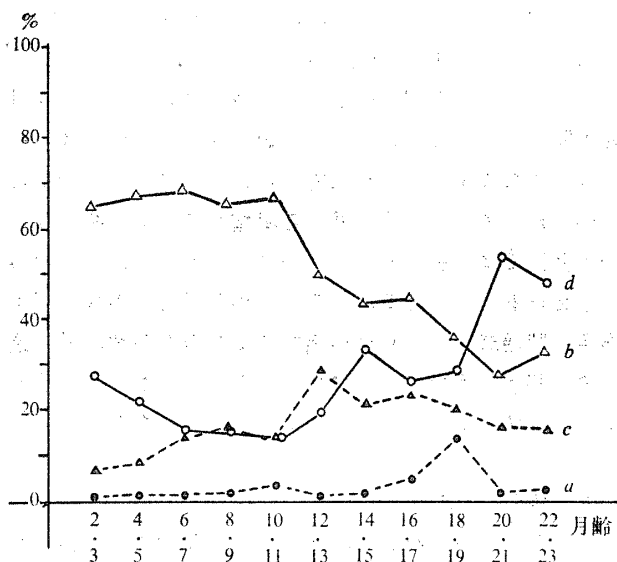


図 8. Mini における各機能レベルの割合
(全 Mini を 100 とする)

c は 10・11 か月で増加し、以後にわずかに増加の傾向を示す。最も強い働きかけであるレベル d は、16・17 か月までほとんどみられないが、18・19 か月以降著しく増え、22・23 か月では Cini の 17% を占めるようになる。月齢に伴い、子どもが相互作用の開始に積極的に関与してくることは、この機能レベルの結果においても示されよう。

Mini の機能レベルは全般にレベル b が多くレベル a が少ない点で、子どもの場合と対照的である(図 8)。しかし、レベル b が 50% を超えているのは 10・11 か月までであり、以後は徐々に減少する。レベル c は 12・13

か月での 29% をピークとしているが、後半の月齢での大きな変化はない。レベル d は 2・3, 4・5 か月でも比較的多くみられるが、14・15 か月で増加し、さらに 20・21 か月でも著しい増加があり 50% を越える。20・21 か月以降では、母親はレベル d の強い働きかけによって相互作用を開始する傾向が著しい。

母子の Ini 行動における機能レベルを比べてみると、22・23 か月の時点では、強い働きかけのレベル d は子どもではまだ母親ほどはみられないが、レベル b, c は母親に近い割合を占めるようになってきている。

b. Res 行動の機能レベル

Cres の機能レベルを、全 Cres 行動を 100 として示したのが図 9 である。18・19 か月までは、ほぼ $x > w > z$ の順であるが、20・21 か月以降は、レベル y, z が増加し、レベル x, w が減少して、22・23 か月では $y > x > z > w$ の順となる。受動的受容のレベル x は特に 8・9 か月まで多く、Cres の 50% 以上を占めるが、月齢とともに減少し、14・15 か月以降は 29~38% である。これとは逆に、より積極的に相互作用に関与する能動的受容のレベル y は、2・3 か月では 10% にも満たないが、月齢に伴って漸増し、特に 20・21 か月で著しく増加して 30% を越える。さらに積極的な解釈・展開のレベル z も、22・23 か月では 23% を占めるようになる。無視・拒否の w は、14・15 か月で 30% であるが 22・23 か月では 13% に減る。

Mres の機能レベルは図 10 に示した。全般に月齢に伴う変化が少なく、レベル w は 4・5 か月でやや多いほかは 7% 前後と低い割合で安定している。また、レベル x,

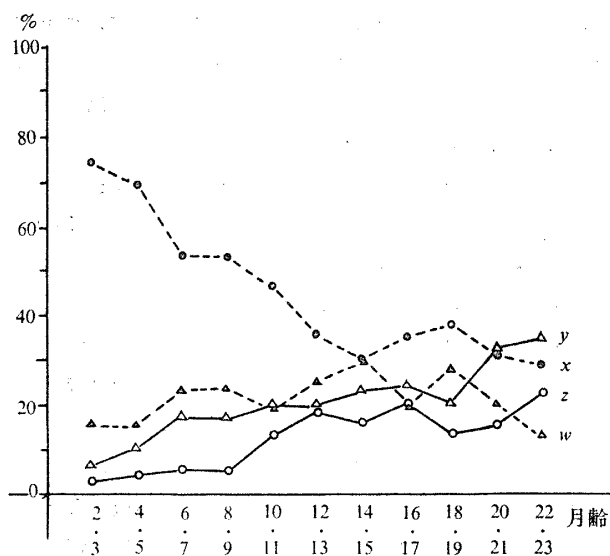


図 9. Cres における各機能レベルの割合
(全 Cres を 100 とする)

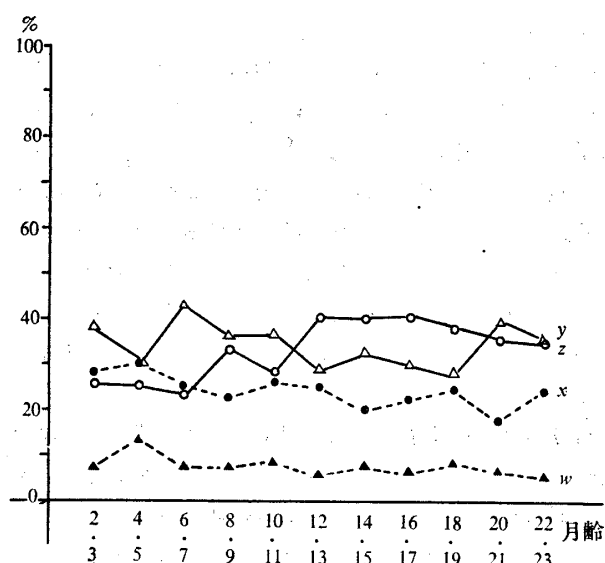


図 10. Mres における各機能レベルの割合

y, z の割合も月齢による変化が少なく、20~40%である。ただし、レベル y とレベル z との関係は月齢によって幾らか変化し、10・11 か月まではレベル y がレベル z を上まわっているが、12・13 から 18・19 か月まではレベル z が優位となる。そして 20・21, 22・23 か月ではレベル y, z がほぼ同じ割合となる。

母子の Res 行動における機能レベルを比べてみると、22・23 か月では、解釈・展開のレベル z は、母親の Res 行動全体の中で 35% を占めているのに対し、子どもでは、かなり増加してきてはいるものの 23% にも満たない。しかし、能動的受容のレベル y は、子どもも母親と同じ程度の割合を占めるようになっていく。

B. 遊びレベル

子ども及び母親の Ini 行動及び Res 行動それぞれにつき、動作 LA[自分], LA[相手], 言語 V[自分], V[相手], V[その他]に分けて、I から V, あるいは①から⑥の分類をし、その頻度を各月齢グループごとに、Cini, Cres, Mini, Mres 行動の全体に占める百分率になおし図 11 から図 30 に示した。以下では、Cini (図 11~15), Cres (図 16~20), Mini (図 21~25), Mres (図 26~30) の順に結果を述べていく。

1. Cini

2・3 か月では、LA [自分] に関するものが大多数を占め、喃語以外の V (言語) は全くみられず、また LA [相手] もごくわずかしみられない。その後の発達を LA と V とに分けてみていく。

まず、初めから多くみられる LA[自分] (図 11) をみ

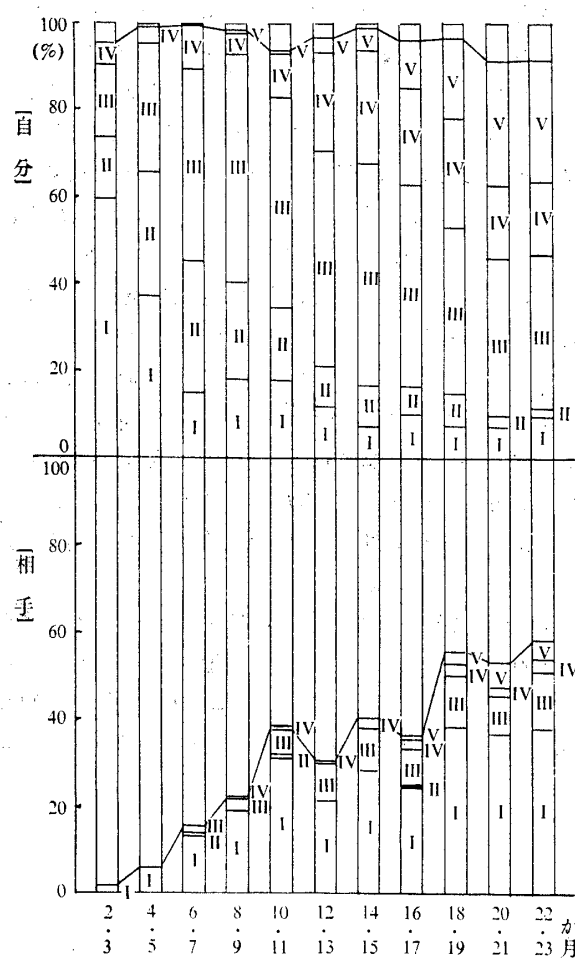


図 11. Cini・LA[自分], [相手] の遊びレベル

ると、どの月齢グループでも 90% 以上ある。2・3 か月ですでに I から IV レベルまでみられるが、V レベルは 8・9 か月で初出し、12・13 か月から漸増し、20・21, 22・23 か月で IV レベルより多くなり 28% を占めている。IV レベルは 2・3 から 10・11 か月までは 4~10% であり、12・13 から 18・19 か月では 23~25% に増加、20・21, 22・23 か月では 17~18% でやや減少している。III レベルは、2・3 か月では 16% であるが、4・5 か月以降では 30~50% であり、その中では 8・9 から 14・15 か月で特に多い。II レベルは、4・5 か月と 6・7 か月で約 30% で最も多く、20・21, 22・23 か月では激減する。I レベルは 2・3 か月では 59% であり、4・5 か月では 37%, 6・7 から 22・23 か月では 6~17% である。また、I レベルと II レベルをあわせたものをみると 2・3 か月から 14・15 か月まで漸減、その後また 20・21, 22・23 か月で減少している。

LA [相手] (図 11) をみると、2・3, 4・5 か月では I レベルのみであり、その後、6・7 か月で II レベル及び III レベルが初出、つづいて 8・9 か月で IV レベルが初

出、さらに、16・17 か月になってVレベルが初出する。これに伴い、全体の量も、2・3か月のわずか1%から、22・23か月の59%まで漸増する。どの月齢でもIレベルが最も多いが、Ⅲレベルは12・13 から22・23 か月では9~13%であり、IVレベルも14・15 か月以降2%を超えている。さらにVレベルも、18・19 か月では3%、20・21 か月では6%、22・23 か月では4%である。

以上みてきたように、自分自身の遊びの動作は、どの月齢でも90%以上あり、2・3か月からすでにIVレベルまでみられるのに対して、相手の遊びを求める動作は量的には、1%から59%まで増加していき、遊びレベルもIからVレベルまで順に初出している。Vレベルの初出は自分自身の遊びの動作においては8・9か月であり、相手の遊びを求める動作では16・17 か月で、前者に比べて8か月遅れている。

V [自分] (図12) は、8・9、10・11 か月でもわずかにみられるが、12・13 か月から漸増、16・17 か月と、20・21、22・23 か月で急増し、22・23 か月では31%に達している。LA [自分] LA [相手] とは異なり、遊

びレベルの高い方から、すなわちVレベルが先にみられ、次第に低いレベルも含み多様になっていく。しかし、16・17 か月以降、どの月齢でも最も割合の大きいのはVレベルである。

V [相手] (図12) は、V [自分] に比べて、初出が6か月遅く14・15 か月であり、また漸増し始めるのも、ようやく18・19 か月からである。22・23 か月でも15%にとどまっている。遊びレベル別にみると、Vレベルが多いが、22・23 か月では、Ⅲ、IV、Vレベルがほぼ同じ割合になっている。

自分の遊びに関する言語と相手の遊びに関する言語を比べると、前者が後者より6か月早く8・9か月で初出し、22・23 か月では後者の約2倍の量がみられる。いずれにおいても、遊びレベルの高いもの、特に象徴遊びに関するものが多いことが注目される。

V [その他] は、全月齢を通してかなり多く14~36%みられる。全体に、喃語や原初語を中心とした⑨が多い。また、10・11 か月以降、④の注意喚起も多くなり、16・17 か月で最も多く、18・19 か月以降では⑨より多くなっている。また、10・11 か月以降、そのうち特に16・17 か月ではカテゴリの種類も増加し、20・21 か月までには、いずれのカテゴリも少なくとも1回はみられる。

以上述べてきたように、Cini 行動の中心は、どの月齢でも自分自身の遊びの動作である。相手の遊びを求める動作は月齢につれて漸増していく。自分の遊びに関する言語は8・9か月以後漸増していく。他方、相手の遊びに関する言語は6か月遅れて、14・15か月以後漸増していく。なお、遊びに直接関係のない言語(発声)は、喃語を含めると全月齢を通してかなり多い。

動作と言語の遊びレベルを比較すると、動作では低レベルの消極的遊びから、物の機能に即した遊びや象徴遊びへと、その中心が高レベルへ移っていくのに対し、言語に関しては、その初出の時点では、象徴遊びまたは物の機能に即した遊びという高レベルの遊びしかみられず、次第に低レベルのものもみられるようになる。ただし、その中心はつねに高レベルの遊びに関する言語である。

以上の Cini 行動の分析から、子どもの遊びの能力の発達には、次のような3つのステップが考えられよう。第1は8・9 か月からであり、象徴遊びが初出し、自分自身の遊びの動作におけるIVレベル及びVレベルすなわち、物の機能と象徴遊びをあわせたものが増加し始める時期である。第2は、16・17か月からの時期で、相手に象徴遊びを求める動作が初出し、さらに、自分自身の遊びに言語による象徴遊びが始まる。第3は、20・21か

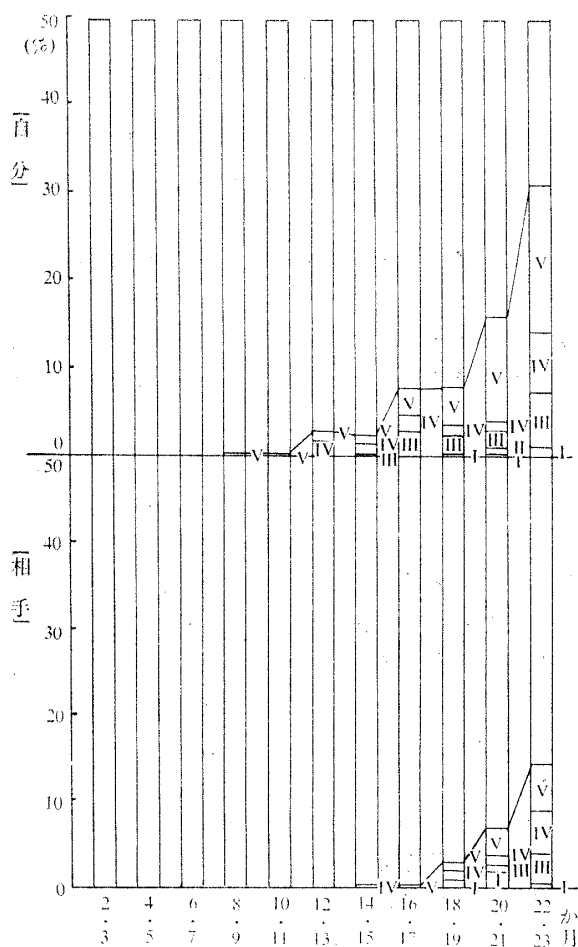


図12. Cini・V [自分], [相手] の遊びレベル

月から、動作において、自分自身の遊びでも相手の遊びを求めるものでも、象徴遊びが機能に即した遊びよりも多くなっている。さらにこの時期には、自分自身の遊びに関する言語も、相手の遊びに関する言語も急増する。

2. Cres

子どもの Res 行動における遊びレベルを図 13 と図 14 に示す。LA [自分] (図 13) は、Res 行動中 70~84% とかなり高い割合を占めている。遊びレベル別にみると、各月齢において I レベルの割合が高い。月齢変化をみると、2・3、4・5 か月では 60% 以上であるが、以後減少し 6・7 から 10・11 か月では 50% 前後となり、12・13 か月以後は 30% 前後で一定となる。II レベルは 6・7 か月で 14% を占め最大であるが、以後減少する。III レベルは 2・3 から 10・11 か月の間で増加し、10・11 から 16・17 か月では 25% を占めほぼ一定であるが 18・19 か月で減少する。IV レベルは、わずかではあるが 2・3 か月からすでにみられ、12・13 か月で激増し以

後 10% 前後を占める。V レベルは 6・7 か月で初出し、12・13 か月以後増加し、特に 20・21、22・23 か月で急増しており、22・23 か月では 18.2% を占めるようになる。また、20・21 か月以後 V レベルの方が IV レベルより多くなる。

以上、10・11 か月までは相手の遊びを注視するなどの受動的な遊びが多いが、10・11 から 16・17 か月では物を取り扱う遊びも多い。物の機能に即した遊びは 12・13 か月で増加し、以後ほぼ一定となるが、より高次の象徴遊びは 12・13 か月以後特に 20・21、22・23 か月で増加している。子どもの月齢変化に伴って、遊びレベルが変化し高度になっていくことが示された。

次に、LA [相手] の月齢変化をみる (図 13)。LA [相手] は 2・3 か月では 0.4% でわずかであるが、以後増加の傾向を示し、22・23 か月では 20% を占める。遊びレベル別にみると、各月齢において I レベルの占める割合が高い。月齢変化をみると、18・19 か月まで増加し以後一定となる。II レベルはほとんどみられない。III レベルは、2・3 か月でもみられ 0.2~4.3% の間にある。IV レベルは 8・9 か月に初出するが、以後 0.6% 以下である。V レベルは 16・17 か月で初出し 20・21 か月で増加する。

以上、Res 行動において、自分自身の動作による遊びの割合には月齢変化はみられなかったが、動作によって相手に遊びを求めることは月齢と共に増加している。全月齢にわたって、母親に、自分自身の遊びを注視させようとするなどの受動的な遊びの割合が高い。それについて、母親に物を取り扱う遊びを求める III レベルの割合が高い。象徴遊びを要求するのは 20・21 か月で増加しており、その時期は、子ども自身の象徴遊びが増加する時期と一致している。

ここで、Res 行動における遊びの動作について、自分自身の遊びの動作と、相手の遊びを求める動作についての比較を行う。どちらの場合も、全月齢で I レベルの占める割合が高いが、子ども自身の場合は減少の傾向を示し、相手の場合は逆に増加の傾向を示している。また、II、IV レベルの遊びを相手に求めることはほとんどない。V レベルの象徴遊びについては初出の時期が異なり子ども自身の象徴遊びの方が 10 か月も早く初出している。しかし、増加の時期は 20・21 か月で一致している。

次に、V [自分] の月齢変化をみる (図 14)。V [自分] は、10・11 か月まではほとんどみられない。16・17 か月から増加傾向を示し、20・21 か月で 9%、22・23 か月で 19% となる。12・13、14・15 か月では III、IV レベルのみがみられる。V レベルは 16・17 か月以後どの月

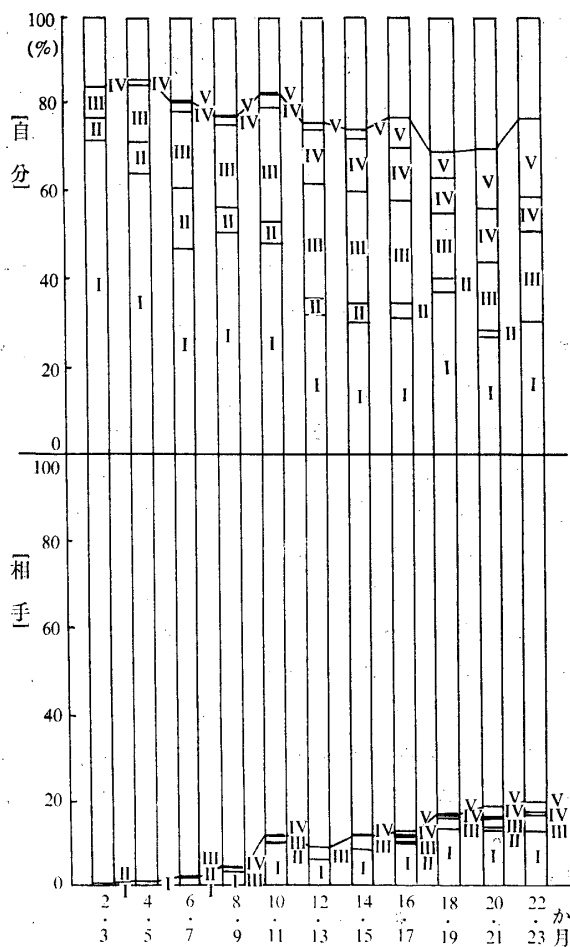


図 13. Cres・LA[自分]、[相手]の遊びレベル

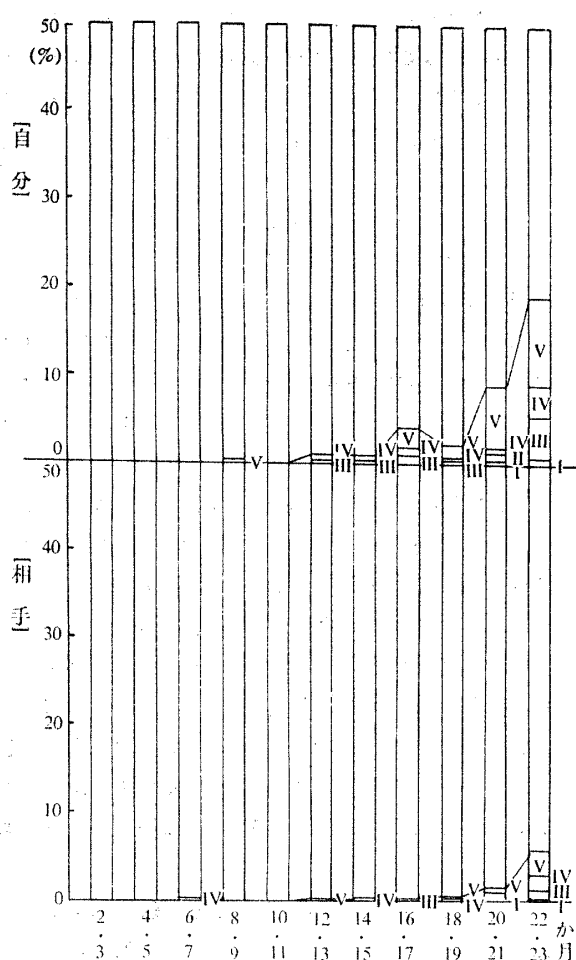


図 14. Cres・V[自分], [相手]の遊びレベル

齢においても、その割合が他のレベルの割合より高くなっている。増加傾向は 20・21 か月で目立つ。また、22・23 か月になるとⅢ、Ⅳレベルが増加する。

以上、16・17 か月以後 V レベルの占める割合が高く、象徴遊びと言語の関連性が示唆される。22・23 か月になると V レベルのほかにⅢ、Ⅳレベルも増加して多様になる。

V [相手] (図 14) は全月齢にわたって少ないが、月齢変化をみると 18・19 か月までは 1% 以下であり、Ⅲ、Ⅳ、V レベルがある。20・21 か月になると 1% を越え、Ⅰレベルが初出する。22・23 か月では 5% を越え、Ⅲ、Ⅳ、V レベルのそれぞれが増加している。

Res 行動における遊びの言語について、自分の遊びに関する言語と相手の遊びに関する言語を比較すると、前者の方が増加の時期が早い。しかしどちらの言語も、22・23 か月ではⅢ、Ⅳ、V レベルのそれぞれが増加しており、この時期に言語による応答が多様化することが示されている。

V [その他] についてみる。これは 2・3 か月からす

でみられ、14・15 か月までは 11% 以下であるが、16・17 か月で増加し以後 12~15% の間にある。18・19 か月までは〈喃語ほか〉の割合が高い。〈命名〉〈注意喚起〉は 10・11 か月で、〈判断・解釈〉〈あいづち〉は 16・17 か月で初出しており、〈あいづち〉は以後増加傾向を示す。

ここで、Res 行動における子ども自身の遊びについてまとめると、言語より動作による遊びの割合が高い。動作の割合は 2・3 か月からほぼ一定である。他方、言語は 14・15 か月まではほとんどなく、16・17 月以後増加しており、子どもの言語発達が認められる。また、V レベルの象徴遊びについて比較すると、動作の V レベルは 12・13 か月以後増加し、言語の V レベルは遅れて 16・17 か月以後増加する。Ⅲ、Ⅳレベルについては、言語では 12・13 か月で初出するが、動作ではすでに 2・3 か月からみられる。言語についてみると、初期には高次のレベルのものが多く、高月齢では低次のレベルのものも多くみられるようになる。この言語の傾向は Ini 行動の場合と同様である。

以上から、子どもの Res 行動についてまとめる。自分自身の動作に関しては、全月齢にわたって、母親の遊びを注視するなどの受動的な遊びが特徴的である。しかし、10・11 か月以後玩具を使って相手の遊びに応答することが多くみられるようになる。これは、子どもの対物行動の発達の観点からは、物のとり扱いの上達と考えられる。さらに、対物行動だけでなく対人行動の発達をも含めてとらえると、それは、物を媒介とした「自分一物一相手」という三項関係の成立と考えられる。なお、Ini 行動においても、10・11 か月に相手に動作で遊びを求めることが増加している。

母親に動作で遊びを要求することは、月齢と共に増加している。これは、子どもの Res 行動が、同時に母親の遊びを誘導する Ini 行動となることが増加することを示しており、相互作用を連続させていく役割を子どもが担うようになることを示唆している。遊びのレベルについては、全月齢にわたって注視などの受動的な遊びを求めることが多いが、20・21 か月以後、象徴遊びを要求することが多い。このように、Res 行動においては、20・21 か月で自分自身の象徴遊び、並びに相手へ象徴遊びを求めることが増加するが、これは Ini 行動においても同様である。

Res 行動における言語は、自分に関する言語、相手に関する言語共に、動作に比べてかなり少ない。自分に関する言語や、遊びに直接関係のない言語は、16・17 か月に増加傾向を示し、22・23 か月になると、自分に関する

表 4. Cini と Cres の比較

	共 通 傾 向	Cini の 特 徴	Cres の 特 徴
全 体 量	<p>○LA [自分] 月齢変化はなくどの月齢でも多い</p> <p>○LA [相手] 全月齢にわたって漸増。LA [自分] より少ない</p> <p>○V [自分] 16・17 か月以後漸増</p> <p>○V [相手] V [自分] より少ない</p> <p>→動作による遊びが初期から多い。言語による遊びは、2歳近で増加する</p>	<p>○V [その他] 全月齢にわたって14~36%を占める</p> <p>→Res より Ini に発声に伴うことが多く、発声によってIniの機能が強められる</p>	<p>○V [その他] 16・17 か月で増加し以後12~15%を占める</p> <p>→16・17 か月以後 Res に発声に伴うことが多い</p>
LA [自 分]	<p>○I, II, III, IV レベル 2・3 か月からみられる</p> <p>→自分自身の遊びの動作は初期から多様</p> <p>○IV レベル 12・13 か月で増加</p> <p>○V レベル 12・13 か月で増加</p> <p>→物の機能に即した遊び、象徴遊びなどの高度な遊びは、12・13 か月で増加する</p> <p>○V レベル 20・21 か月で急増</p> <p>→象徴遊びが本格化する</p>	<p>○III レベル 6・7 か月以後どの月齢においても最大である</p> <p>○V レベル 10・11か月で初出</p> <p>→象徴遊びのような高度の遊びの初出は、Res よりおそい</p>	<p>○I レベル 2・3 か月以後どの月齢においても最大である</p> <p>○V レベル Ini より早く6・7 か月で初出</p>
LA [相 手]	<p>○I レベル どの月齢においても最大である</p> <p>→相手に受動的な遊びを求めることが多い</p> <p>○II レベル 8・9 か月で初出</p> <p>○IV レベル 8・9 か月で初出</p> <p>→8・9か月で、相手に求める遊びの内容が多様する</p> <p>○V レベル 16・17か月で初出し、20・21か月で増加する</p> <p>→象徴遊びを相手に求めることは遅れる</p>	<p>○III レベル 6・7 か月で初出</p> <p>→相手に物を取り扱った遊びを求めることは、Res よりおそい</p>	<p>○III レベル Ini より早く2・3 か月で初出</p>
V [自 分]	<p>○IV レベル 12・13 か月で初出</p> <p>○V レベル 8・9 か月で初出。16・17か月以後どの月齢においても最大である。20・21か月で増加する</p> <p>→16・17か月以後、象徴遊びに関する言語が多い</p> <p>○III, IV, V レベル 22・23か月で増加する</p> <p>→言語内容が多様化する</p>	<p>○I レベル 18・19か月で初出</p> <p>○III レベル 14・15か月で初出</p> <p>○V レベル 初出後漸増する</p>	<p>○I レベル Ini よりおそく20・21か月で初出</p> <p>○III レベル Ini より早く12・13か月で初出</p> <p>○V レベル 初出後、16・17か月までみられない。16・17か月以後全体に増加傾向を示す</p> <p>→自分の象徴遊びに関する言語が、本格的にみられるのは、Ini よりおそい</p>

(次頁へ続く)

(表 4 続 き)

	共 通 傾 向	Cini の 特 徴	Cres の 特 徴
V [相手]	○II レベル みられない	○I レベル 18・19か月で初出 ○III レベル 20・21か月で初出 ○IV レベル 14・15か月で初出 ○V レベル 16・17か月で初出 →相手の遊びの言語化, 相手に遊びを求める言語は, Res よりおそい	○I レベル Ini よりおそく 20・21か月で初出 ○III レベル Ini より早く 16・17か月で初出 ○IV レベル Ini より早く 6・7か月で初出 ○V レベル Ini より早く 12・13か月で初出
V [その他]	○〈喃語ほか〉 が 2・3~16・17 か月までどの月齢においても最大である ○16・17か月以後, 多様なカテゴリがみられるようになる →16・17か月以後, 遊びに直接関係のない発声の内容が多様化する	○〈注意喚起〉 10・11か月で初出し, 18・19か月以後どの月齢においても最大である →10・11か月以後, Ini の機能を強める発声が行われる	○〈あいづち〉 16・17か月で初出し, 20・21か月以後どの月齢においても最大である →16・17か月以後, 応答的な発声が行われる

言語相手に関する言語の両方において, 内容が多様化する。以上の言語に関した傾向は, Ini 行動においても同様である。

3. Cini と Cres の比較

Cini と Cres の結果を比較し, それを表 4 に示す。

4. Mini

図 15 から Mini における LA [自分] は, 子どもの月齢につれて減少していることがわかる。消極的な遊びの I レベルと動作なし (言語のみによる Mini を示す) を除くと, 2・3 か月で 80%以上の動作があるが, 20・21 か月からは 50%程度になる。遊びレベルごとにみると, II レベルは 2・3 か月が主であとはほとんどない。III レベルは 4・5 か月から 12・13 月の間で特に多くみられる。IV レベルは 2・3 か月 54%から 8・9 か月の 33%へ減少し, その後再び増加した後, 22・23 か月で 10%へと減少している。V レベルは, 2・3 か月では 3%と少ないが, 22・23 か月では 19%と増加している。

以上から, 母親が自分自身の遊びの動作によって遊びを誘導することは, 2・3 か月からすでに多く, その遊びの内容も様々なレベルである。しかし, 2・3 か月では主に物の機能を示すことが多く, その後, 物をとり扱う III レベルが増加し, さらに高次な V レベルが増加する。

図 15 から, Mini における LA [相手] は, 2・3 か

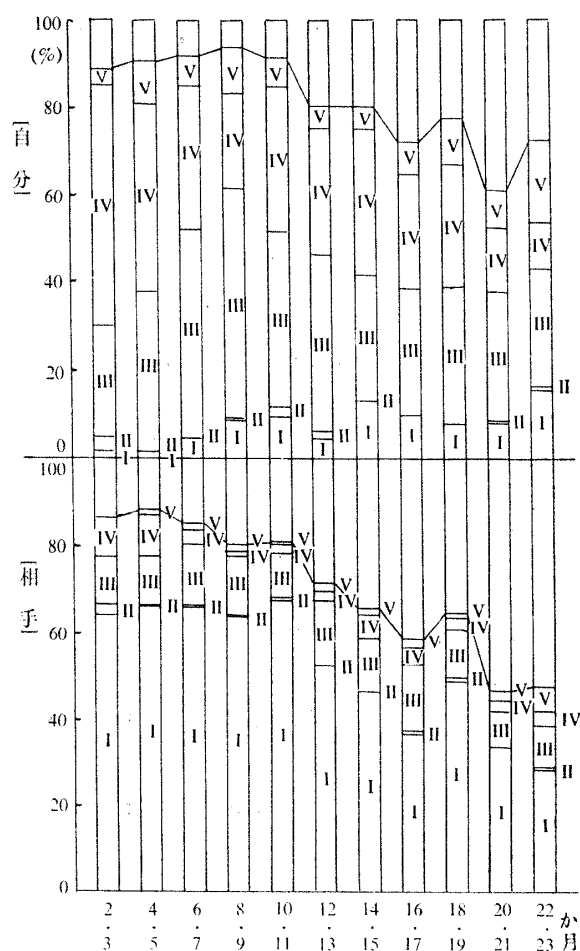


図 15. Mini・LA[自分], [相手] の遊びレベル

月の 87% から 22・23 か月の 48% へと月齢につれて減少している。相手に求める遊びのレベルは I レベルがどの月齢でも一番多く、特に 12・13 か月までは 50% 以上を占めている。II レベルは 2・3 か月でわずかにみられるが、あとはほとんどない。III レベルは I レベルの次に多いが、8% から 15% の範囲で月齢による傾向はない。IV レベルは 2・3, 4・5 か月で最も多く 10% 程度であるが、他の月齢では少ない。V レベルは 4・5 か月で初出し、22・23 か月で最も多く、6% になる。

以上から、母親が遊びを誘導するときに相手の遊びを求める動作は、低月齢であるほど多く、子どもに求める遊びの内容は、母親自身の遊びの動作が多様であったのに比べ、主に母親の行動に注目、受容する I レベルで占められている。また、量は異なるが、IV レベルが 4・5 か月までに多いことは、LA [自分]、LA [相手] に共通であり、母親が自分で物の機能を示すのみならず、2・3 か月の子どもにも機能的動作をさせていることを示している。

図 16 をみると、Mini における V [自分] は 15% か

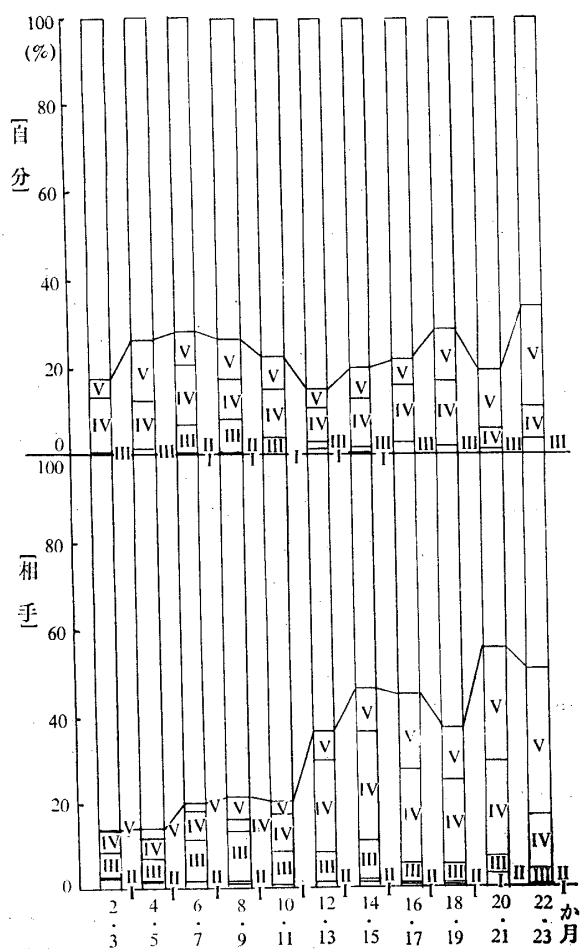


図 16. Mini・V[自分]、[相手]の遊びレベル

ら 35% の範囲で全体に量が少なく、月齢による傾向は明確ではない。遊びのレベルは、I, II レベルがほとんどなく、III レベルは 6・7 から 10・11 か月で比較的多い。IV レベルは 2・3 か月から 18・19 か月まで最も多くを占めるが、20・21 か月からは V レベルの方が多くなる。V レベルは 2・3 か月からあり、4・5 か月と 20・21 か月以後が比較的多い。

以上から、母親が自分の遊びに関する言語で遊びを誘導することは、月齢にかかわらず少なく、内容は主に物の機能に関することや象徴遊びに関することである。

図 16 は、Mini における V [相手] が月齢につれて増加し、2・3 か月は 14% であるが、22・23 か月では 51% になることを示す。遊びレベルをみると、I レベルは 2・3 か月の 3% 以外はほとんどみられず、II レベルもさらに少ない。III レベルは 6・7 か月から 14・15 か月の間で比較的多く、7% 以上である。IV レベルは初期からあるが特に 12・13 から 20・21 か月の間で 20% 以上と多くなっている。V レベルも初期からあるが、月齢につれて増加し、12・13 か月から 7% 以上、16・17 か月から 10% 以上、20・21 か月から 25% 以上と V [相手] の半分近くを占めるようになる。

以上から、母親が相手の遊びに関する言語で遊びを誘導することは、自分の遊びに関する言語とは異なり、月齢につれて増加する傾向がある。このことは、母親が自分の遊びに言及する時よりも子どもの遊びに言及する時の方が、子どもの言語理解能力を考慮していることを示す。言い換えると、単に自分の遊びに関する言語の理解を求める時よりも子どもの遊び行動遂行に関する言語や、子どもの遊びの解釈などの言語を理解を求める時の方が、より子どもの実際の能力を考慮しているため、月齢による増加が生ずるものと考えられる。遊びの内容についてみると、自分の遊びの場合も相手の遊びの場合も、III, IV, V レベル以外は少ない。III レベルが 6・7 か月から 10・11 か月の間で比較的多いことは、両者で共通している。IV レベルの増減は自分の場合と相手の場合で多少異なり、自分の場合は初期に多く、相手の場合は後期に多いが、20・21 か月から V レベルの方が多くなる点は一致している。V レベルの月齢に伴う増加は自分の場合よりも相手の場合で顕著である。

最後に Mini における V [その他] をみると、12・13 か月以後に全体量が少なくなる傾向がある。これは、V [相手] とは逆の傾向である。言語のカテゴリとしては、初期に多い④〈注意喚起〉、⑨〈喃語ほか〉が、12・13 か月から減少する傾向がある。また、他に初期に多いものとしては、③〈命名〉、⑤〈判断・解釈〉、⑦〈主観的説明〉

があり、比較の後期に多いものとしては、①〈Wh-疑問〉、②〈Wh 以外の疑問〉、⑥〈あいづち〉などがある。

以上から、遊びに直接関係のない言語は、他の言語と比べると 10・11 か月頃まで多くを占めており、その内容は注意を求めたり喃語的発声をするなどが主である。その後、12・13 か月頃からは、子どもの遊びに関する言語が遊びに直接関係のない言語を上まわるようになり、単純な発声による誘導が、遊びに関する情報を含んだ言語による誘導へと変化している。さらに、遊びに直接関係のない言語の中では初期には〈命名〉というかたちでの言語訓練や、あやしの表現としての〈解釈・説明〉が多いが、後期には質問や応答が多いことから、言語による情報のやりとりという相互作用の存在が認められ、子どもの言語能力に対応した変化と考えられよう。

次に、以上に述べたことを動作と言語の比較という点から見直していく。まず、自分自身の遊びに関する動作と言語を比べると、全体に動作の方が量がかなり多い。また、動作では月齢に伴う傾向がみられるが、言語では一貫した傾向がない。遊びのレベルは、動作では主にⅠⅡ、Ⅲレベルが多く、言語ではⅣ、Ⅴレベルが主である。共通点は、Ⅲレベルの多い時期が一部重なり、6・7 から 8・9 か月の間にみられること、Ⅳレベルが 20・21 か月から減少していること、Ⅴレベルが 2・3 か月からみられ、22・23 か月で特に多くなることなどである。母親の言語ではあらゆる遊びレベルが最初から出てくると予想されたが、実際にはⅠ、Ⅱ、Ⅲレベルが比較的少ないことから、レベルによって動作と言語のどちらでより表現しやすいかに違いがあると思われる。そのため、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲレベルは動作で、Ⅴレベルは言語での方が多くの割合を占めている。Ⅳレベルはどちらでも表現しうるものと考えられる。

次に相手の遊びを求める動作と言語とを比べると、量的にはやはり動作の方が多。月齢に伴う変化は動作の場合には月齢につれて減少傾向があるが、言語の場合は逆に増加し、50%を基準にすると、20・21 か月の時点で両者が逆転している。遊びのレベルについては、動作と言語で共通するのは、Ⅴレベルが月齢に伴って増加する点である。不一致の点は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲレベルとも動作の方で多くみられ、逆にⅣ、Ⅴレベルは言語の方で多いことⅢレベルは動作で月齢に伴う変化が明確でないこと、Ⅳレベルでは、動作では初期に多く言語では 12・13 か月から多いという逆の傾向があること、Ⅴレベルでは、動作では初出が 4・5 か月だが言語では 2・3 か月からあること、などである。

最後に、母親による遊びの誘導についてまとめると、

まず動作による誘導から言語へという変化がみられるが、それは自分に関するより相手にする場合で著しい。つまり、子どもの言語能力の発達につれ動作でより言語で誘導する割合が多くなるものと思われる。一方、自分の遊びの動作も消極的なⅠレベルの増加などの質的变化があり、全体に言語による誘導か消極的動作による誘導へと変わっている。遊びの内容面では、まず初期から多様性が認められるが、この動作から言語へという変化に関連して、言語で表現しやすいと思われるⅤが月齢に伴って増加している。また、Ⅳレベルは初期は動作で、後期は言語で表現される傾向がみられる。Ⅲレベルは動作の方が量的に多いが、動作言語に係わらず、6・7、8・9 か月頃に多い傾向があり、これは Cini, Cres の動作が 8・9、10・11 か月頃に増加する傾向に一步先行するため、両者の関連が考えられる。Ⅱレベルは母親の誘導としては、2・3 か月を除いてはほとんど生じないといえる。Ⅰレベルは、主に動作で前述したように自分では増加の傾向にあるが、相手に対しては減少傾向を示し、子どもの積極性を求める誘導が認められる。

5. Mrs

Mrs における LA [自分] を図 17 に示す。月齢による変化は少なく、ほぼ 50~60% である。遊びレベルごとにみると、Ⅰレベル、Ⅲレベルの占める割合が全般に多く、特にⅠレベルは、2・3 か月では 11%だが 6・7 か月で急増し 35%となる。以後 10・11 か月までは 30%以上を占めている。Ⅱレベルは、全月齢を通じてほとんどみられない。Ⅲレベルは、2・3、4・5 か月の低月齢で多く、24%を占める。以後は減少し、15%前後となる。Ⅳレベルは 2・3、4・5 か月で 24%とかなり多いが、その後 10・11 から 18・19 か月でも 9~11%と再び増加している。Ⅴレベルは 2・3 か月では 1%にも満たないが、20・21 か月でかなり増加し、Ⅳレベルを上まわって 13%となる。母親が動作で子どもの遊びに応ずることは、全体量としては大きな変化はないが、応ずる遊びのレベルには月齢に伴う変化が認められる。すなわち、2・3、4・5 か月の低月齢では、物を取り扱うⅢレベルや物の機能を示すⅣレベルが多いが、6・7 か月以降、消極的なⅠレベルが増加したのち、さらにより高次のⅤレベルの増加がある。

Mrs における LA [相手] は、2・3、4・5 か月では 30%を越えるが、以後は 11~24%と少ない (図 17)。全月齢を通してⅠレベルが多い。Ⅱレベルはほとんどみられない。Ⅲレベルは、特に 2・3、4・5 か月で多く、11~13%である。Ⅳレベルは全般に少ないが、2・3 か

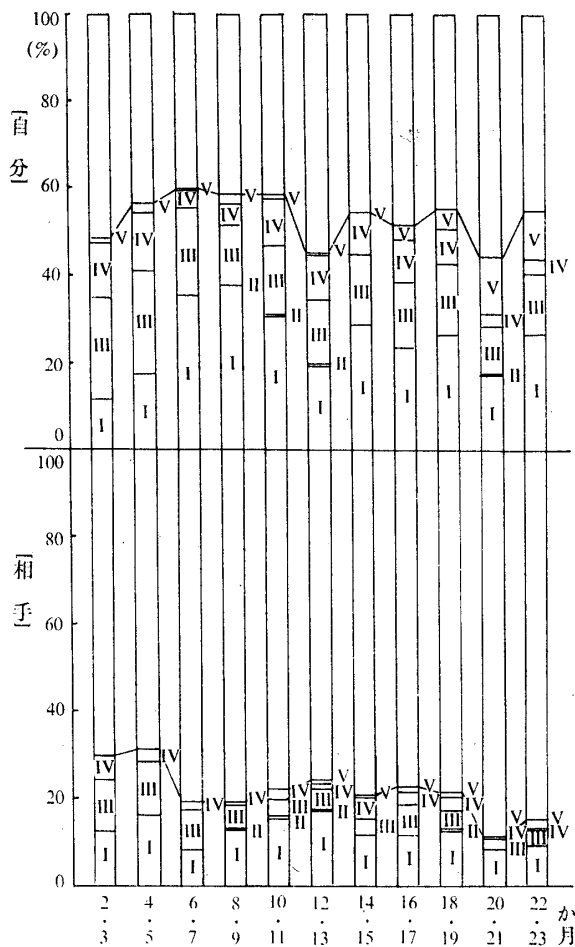


図 17. Mres・LA[自分], [相手] の遊びレベル

月で6%, 14・15 から18・19か月で3~5%とわずかに多くみられる。Vレベルは12・13か月で初出し, 22・23 か月では3%になる。母親が動作で子どもの遊びを求めることは, 2・3, 4・5 か月の低月齢で多く, この月齢では他月齢に比べ, IIIレベル, IVレベルが多くみられた。この点は LA [自分] とも同様の結果であり, 母親が自分で物を取り扱ったり, 物の機能を示して子どもの遊びに応ずるのみでなく, 子どもにもこれらの動作をさせようと積極的に働きかけることを示すものである。

次に, Mres の言語についてみる。V [自分] を図 18 に示したが, 全般に少なく, 5~15%である。I レベル, II レベルは全くない。III レベルも極めてわずかである。したがって, 2・3 か月から, IV, V レベルの高次なレベルが大部分を占めていることになる。IV レベルは特に月齢に伴う傾向はない。V レベルは 20・21 か月, 特に 22・23 か月で著しく増加し, 10%を越える。母親が, 子どもの遊びに対して自分の遊びに関する言語で応ずることは, 全般に少なく, 内容としては主に物の機能や象徴遊びに関することである。特に 20・21, 22・23 か月で

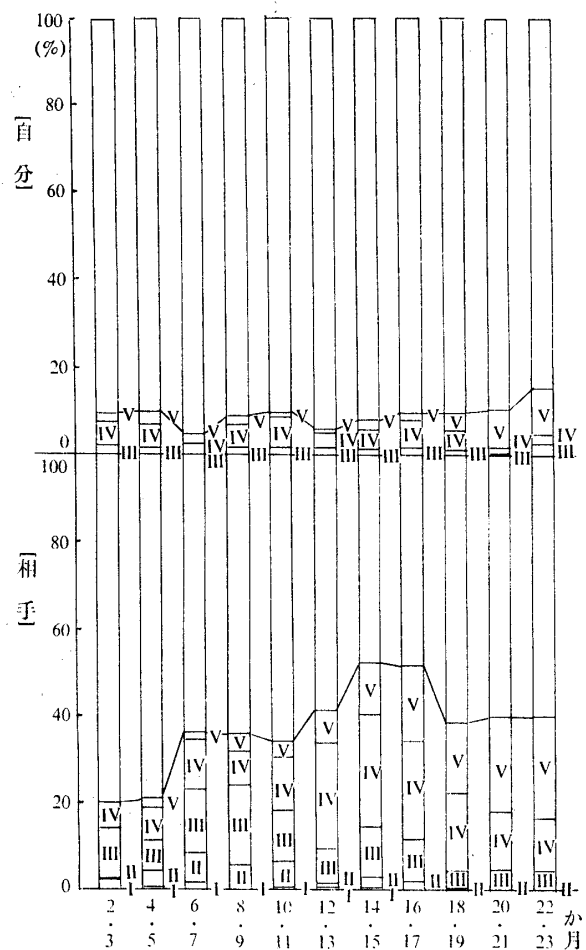


図 18. Mres・V[自分], [相手] の遊びレベル

は象徴遊びに関する言語の増加が著しい。

V [相手] の結果を図 18 に示す。全体量は, 2・3 か月の 21%から 14・15, 16・17 か月の 52%をピークとして増加傾向を示し, 以後は 40%に減少する。各遊びレベルについてみても, 増加, 減少の傾向が比較的明白であり, それぞれのピーク月齢をとると, I レベルが 2・3 か月, II レベルが 6・7 か月, III レベルが 8・9 か月, IV レベルが 14・15 か月, V レベルは 4・5 か月に初出し, ピークは 22・23 か月となっている。母親が子どもの遊びに言及して応ずることは, 自分自身の遊びに言及して応ずることよりもはるかに多くみられる。またその内容も月齢に伴って変化し, 低次のレベルから高次のレベルへと移行していく。18・19か月以降は, I から IV レベルまでが減少し, V レベルの象徴遊びに関する言語が多くなっていくが, 相手の遊びに関する言語の全体量は 14・15, 16・17 か月のピーク時より減少している。しかし一方では自分自身の遊びに関する言及の方は幾分増加している。象徴遊びの言語では, 相手の行動の言語化, 要求のみでなく, 自分に関する言及も行い, 子ども

との言語のやりとりの中で象徴遊びが成立するものと考えられる。

V [その他] をみると、12・13 か月までは40%を越えるが、以後やや減少する。内容を見ると、2・3 か月からほとんどのカテゴリが出現している。最も多いのは⑤<判断・解釈>または⑥<あいづち>である。<あいづち>は特に月齢に伴う傾向はない。⑧<模倣>はIni 行動では少なかったが、Res 行動では全月齢を通してみられる。①<Wh-疑問>も少ないが全月齢にみられる。月齢に伴う変化をみると、まず、<判断・解釈>は2・3 か月で23%とかなり多く、8・9 か月までは10%を越えているが以後減少する。⑨<喃語ほか>も4・5 か月の低月齢で特に多い。④<注意喚起>も10・11 か月までは比較的多い。これに対し、③<命名>は10・11 から20・21 か月の比較的高月齢で多くみられる。

V [自分]、V [相手]、V [その他] を比べてみると、遊びに直接関係のない言語であるV [その他] が10・11 か月まではこの3つのうち最も多く、以後は相手に関する言語であるV [相手] の方がこれを上まわるようになる。Mrs ではMini に比べ、全般に相手に関する言語や遊びに直接関係しない言語が多く、応答の一般的性質としての対話的表現を、初期から子どもに対して用いていると考えられる。月齢による変化をみてみると、10・11 か月までの相手に関する言語の内容は、I、II、III レベルが多く、また、遊びに直接関係のない言語では<判断・解釈><喃語ほか><注意喚起>が多い。したがって、これら前半の月齢では、母親は子どもの遊びレベルの言語化を行なう、または遊びに直接関係しない言語でも玩具に対する子どもの好悪の解釈やほめことば、情報伝達的でない発声、注意喚起による遊びへの注意の持続をはかるなどにより、子どもの遊びを積極的に受けとめ、さらに促そうとしているといえよう。13 か月以降は、相手の遊びに関するIV レベルの増加、遊びに関係しない言語での<命名>の増加、さらに高月齢になると、自分、相手の両方の遊びに関するV レベルの増加がみられる。これは、まず、物の機能に即した子どもの遊びの言語化や物の名を示して応ずることにより、物そのものと密着した遊びを促し、さらに、言語による象徴的な遊びへと徐々に移行していくものと思われる。

動作と言語について大きくまとめると、Mrs における動作では、[自分][相手] とともに低月齢の一時期を除いては、月齢に伴う全体量の変化がほとんどなかったのに対し、言語では特に[相手] の場合に、月齢に伴う増加傾向が16・17 か月まで著しく認められた。

自分に関する動作と言語とを比べると、動作の方は、

どの月齢においても40%を超え、多い時には60%に達しているのに対し、言語は最大でも15%であり、自分の遊びの言語化が極めて少ないといえる。内容を見ると、動作ではI、III レベルの占める割合が全般に多いのに対し、言語ではI レベルは全くなく、III レベルも1~2%に過ぎない。かわってIV、V レベルが大半を占め、動作と言語とで表現される遊びの内容がかなり異なることを示すものと思われる。この点についてはMini でもほぼ同様であった。

相手に関する動作と言語を比べると、2・3、4・5 か月の低月齢では動作の方が多いが、6・7 か月以降は言語が著しく増加し、動作よりも多くなる。自分に関するものの場合と同じく、動作ではI、III レベルが多く、I レベルは全月齢を通してかなり多いが、III レベルは特に低月齢で多くみられている。これに対し、言語では月齢に伴ってより高次のレベルへと移行している。母親は、応答では動作によって子どもに積極的に働きかけることは低月齢を除いては少なく、主に、言語によって子どもの遊びを反映した要求や遊びの言語化を行っているといえよう。

母親の応答のしかたの特徴をまとめると次の4点になる。まず第1に、自分自身に関するものは動作、言語とも月齢に伴う変化はほとんどなく、2・3 か月からIV、V レベルの高次の遊びレベルが出現している。また、自分自身の遊びへの言及は全体に量が少なく、この傾向は開始行動におけるよりも著しい。第2に、相手に関するものは、2・3、4・5 か月は動作で表現されるが、6・7 か月以降は言語が主体となり、言語の内容も子どもの月齢に伴ってより高次のものへと変化する。このような母親の応答のしかたは、子どもの能力を反映したものと考えられる。第3に、動作による場合の月齢に伴う内容の変化は、低次から高次のレベルへというのではなく、自分、相手に関するものともに、2・3、4・5 か月の低月齢ではIII、IV レベルが多く、以後I レベル、IV レベル、V レベルへと移行する。低月齢では、物を取り扱ったり、物の機能に即した遊びを母親が積極的に子どもと共に行うことによって、子どもの遊びにに応じているが、6・7 か月以降は子どもの遊びに受動的に応じ、さらに子どもの発達に合わせて応じていこうとするといえよう。第1から第3までの特徴をまとめて考えると、子どもに向けてなされることが多く、その内容も子どもの発達を反映したものであることが、母親の応答の著しい特徴といえることができるであろう。第4に象徴遊びについてみると、自分自身の動作、言語では2・3 か月からあるが、相手に関するものでは言語で4・5 か月、動作ではさら

表 5. Mini と Mers の比較

	共 通 傾 向	Mini の 特 徴	Mers の 特 徴
全 体 量	<ul style="list-style-type: none"> ○LA [相手] 月齢に伴う減少 ○V [自分] 月齢差なし ○V [相手] 月齢に伴う増加 ○V [その他] 月齢に伴う減少 →月齢に伴い、動作より言語で、言語の中でも相手に関する遊びの情報を与えるもので子どもに接する 	<ul style="list-style-type: none"> ○LA [自分], LA [相手], V [自分] が Res に比べて多い →動作による誘導 ○LA [自分] 月齢に伴う減少 →動作による誘導から言語による誘導へ 	<ul style="list-style-type: none"> ○V [相手], V [その他] が Ini に比べて多い →言語による応答の重要性 ○LA [自分] 月齢差なし →応答としての遊びの動作量は一定
LA [自 分]	<ul style="list-style-type: none"> ○全体量が多い (50%以上) ○II レベルが少ない →Ini の 2・3 か月以外は誘導も応答もしない遊び ○IV レベルは 2・3, 4・5 か月で多い →機能的行動を初期から子どもに示す ○IV レベルはまた 10・11 から 18・19 か月で再び多い →後期での増加は子どもの能力の反映か ○V レベル 2・3 か月からあり、月齢に伴う増加 →初期から高次なしレベルの存在 	<ul style="list-style-type: none"> ○I レベル 月齢に伴う増加 (6・7 か月から) →消極的誘導への変化 ○III, IV レベル 全体に多い ○III レベル 4・5 から 12・13 か月で多い →子どもの能力の反映か ○V レベル 22・23 か月で IV レベルを上まわる 	<ul style="list-style-type: none"> ○I レベルが Ini に比べ多い (特に 6・7 から 10・11 か月頃多い) →応答の受動性 ○III レベル 2・3, 4・5 か月で多い →初期で特に積極的に物のとり扱いを示す ○V レベル 20・21 か月で IV レベルを上まわる
LA [相 手]	<ul style="list-style-type: none"> ○I レベルがどの月齢でも一番多い ○II レベル少ない (Ini の 2・3 か月にわずかにあるのみ) ○V レベル 22・23 か月で増加, IV レベルを上まわる 	<ul style="list-style-type: none"> ○I レベル Res に比べ多い →子どもの受動を求める ○I レベル 月齢に伴う減少 →動作で子どもの受動性を求めることが減る ○III レベル どの月齢でも I に次いで多く、月齢差なし →物のとり扱いを求めることは 2・3 か月から一定 ○IV レベル 2・3, 4・5 か月で多い →初期で機能的行動の要求 ○V レベル 4・5 か月で初出 →初期から象徴遊びを求める 	<ul style="list-style-type: none"> ○全体量 Ini に比べ少ない (35%以下) ○I レベル 月齢差なし ○III レベル 2・3, 4・5 か月頃に多い →初期で特に物のとり扱いを求める ○IV レベル 2・3 か月, 14・15 か月で多い →初期は機能的行動の要求, 14・15 か月からは子どもの能力の反映か ○V レベル 12・13 か月で初出 →子どもの能力に対応した象徴遊びによる応答か
V [自 分]	<ul style="list-style-type: none"> ○全体量が少ない (Ini 35%以下, Res 15%以下) ○I, II レベルはほとんどない ○IV, V レベルが大半を占める →自分の遊びに関しては高次の遊びレベルで言及 ○IV レベル 2・3 か月からあり, 20・21 か月から減少 	<ul style="list-style-type: none"> ○III レベル 6・7, 8・9 か月に多い 	<ul style="list-style-type: none"> ○全体量が少ない ○III レベル 少なく、傾向なし

(次頁へ続く)

(表 5 続 き)

	共 通 傾 向	Mini の 特 徴	Mres の 特 徴
	<p>○V レベル 2・3 か月からあり月齢に伴って増加の傾向 20・21か月から IV レベルを上まわる。</p> <p>4・5 か月の増大→初期の母親の高次の遊び</p> <p>22・23か月の増大→子どもに合わせた高次の遊びか</p>		
V [相手]	<p>○全体量 月齢に伴い増加 →子どもの言語能力の反映か</p> <p>○I レベル 少ない</p> <p>○III レベル 6・7 から 10・11 か月頃にピーク</p> <p>○IV レベル 12・13 から 16・17 か月頃にピーク</p> <p>○V レベル 4・5 か月からあり月齢に伴いほぼ増加, 20・21 か月で IV レベルを上まわる</p> <p>→初期から子どもに関する多様な遊びレベルで言及し, 次第に高次化していく。そこには子どもの能力も反映している</p>	<p>○全体量 20・21 か月から Res に比べて多くなる</p> <p>→子どもの言語理解可能性に応じた言語による誘導</p> <p>○II レベル 少ない</p> <p>→母親の誘導の性質</p> <p>○III レベル 6・7 から 14・15 か月で多い</p> <p>○IV レベル 12・13 から 20・21 か月で多い</p> <p>○V レベル 2・3 か月からある</p>	<p>○全体量 18・19 か月まで Ini に比べて多い</p> <p>→初期から子どもに, 言語による解釈・説明, 要求などで応答</p> <p>○II レベル 4・5 から 10・11 か月で多い</p> <p>→子どもの行動反映か</p> <p>○III レベル 2・3 から 16・17 か月で多い</p> <p>○IV レベル 12・13 から 16・17 か月で多い</p> <p>○V レベル 4・5 か月で初出</p>
V [その他]	<p>○全体量 月齢に伴う減少 (特に 12・13 か月頃から)</p> <p>→遊びに直接関係のない言語から遊びに関する言語へ変化</p> <p>○〈喃語ほか〉が初期に多い</p> <p>○〈判断・解釈〉も初期に多いが以後減少</p> <p>○〈注意喚起〉の減少傾向</p> <p>→あやしや注意を求める発声から情報を伝える言語へ</p>	<p>○〈注意喚起〉が主</p> <p>○〈命名〉前半 (12・13 か月まで多い)</p> <p>○〈主観的説明〉前半に多い</p> <p>○〈Wh-疑問〉〈Wh 以外の疑問〉〈あいづち〉後半に多い</p> <p>→子どもの言語能力反映</p>	<p>○全体量 Ini に比べ全月齢で多い</p> <p>→応答には遊びに関係ない言語や発声で応ずることが多い</p> <p>○〈模倣〉が多い</p> <p>→模倣による応答が全月齢にわたってある</p> <p>○〈判断・解釈〉と〈あいづち〉が主である</p> <p>○〈命名〉後半 (10・11 か月から) に多い</p> <p>○〈主観的説明〉一貫した傾向なし</p> <p>○〈あいづち〉全月齢を通して多い</p> <p>○〈Wh-疑問〉全月齢を通してある</p> <p>→応答の一般的性質。初期から子どもに対して対話的表現を用いている</p>

に遅れて 12・13 か月に初出がある。その後、相手に関する言語では 14・15 か月から漸増し、20・21 か月になると、自分自身の場合の動作、言語とも著しい増加を示す。前半の月齢では、動作と言語で母親自身が象徴遊びを行って子どもに示すのみであるが、後半の月齢では、特に言語によって子どもに象徴遊びを求めたり、子どもの遊びを象徴遊びと解釈して言語化を行ったりする。そして、20・21 か月以降は、動作と言語を用いて自らも象徴遊びを行って応じつつ、子どもにもそれを求め、象徴遊びでのやりとりが行われるようになってくると思われる。

6. Mini と Mrs の比較

Mini と Mrs の比較との結果を比較し、それを表 5 に示す。

IV. 考 察

A. 母子の遊びの相互作用

以上、Cini, Cres, Mini, Mrs のそれぞれについて遊びレベルの月齢変化をまとめた。相互作用における両者の影響関係は、要求—応答という基本的な関係から、要求—要求というより発展的関係など様々なものが考えられる。さらに、相手の動作の影響が自分自身の直接的な遊び行動におよぶ場合もあるし、より間接的に自分が相手に求める遊び行動の内容におよぶ場合もある。そこで、この項では特に相互作用の観点から、子どもの Ini 行動と、母親の Res 行動および Ini 行動の関係(表 6)と、母親の Ini 行動と子どもの Res 行動の関係(表 7)を分析し、遊び場面における母子相互作用について、考察を行う。なお、表 6、表 7 の構成について表 6 を例にあげて説明する。

	Cini・LA[自分]の特徴	Mrs・LA [自分]
I		⑦→④
II		
⋮		

Cini の遊びレベルごとに、Cini の遊びレベルとそれに対応する Mrs の遊びレベルを比較し、考察を行う。「⑦→④」で例示された⑦は 1 レベルに関する Mrs・LA [自分] の特徴を記述したものであり、④は、1 レベルの Cini・LA [自分] と Mrs・LA [自分] の特徴を比較したものである。以下、表 6、表 7 に基づいて母子の遊びレベル間の関係を検討する。

1. Cini と Mrs の関係: 子どもの誘導が母親の応答行動にどのように影響するか(表 6 参照)

初めに、子どもの遊びの発達についてまとめておく。Cini における自分自身の動作の遊びレベルの月齢変化を、子どもの遊びの発達とみなすと、各遊びレベルが多くみられる特徴的な時期(ピーク時期)がある。消極的な遊びは 2・3 か月、物を自分にもっていく遊びは 6・7 か月、物をとり扱う遊びは 8・9 か月、物の機能に即した遊びは 14・15 か月、象徴遊びは 20・21 か月がそれぞれピークの月齢となっている。

a. 子どもの求める母親の遊びと母親自身の遊び

子どもが母親の注目や受容を求めるようになることに対応して、母親も受動的になっていく。また、母親は 2・3 か月から物のとり扱い、物の機能に即した遊び、象徴遊びなど様々な意味ある遊びで応答している。しかし、物の機能に即した遊びでは、子どもの要求の初出する 8・9 か月以後、象徴遊びでは子どもの要求の初出の 16・17 か月以後、増加傾向がみられ、子どもの要求に対応して母親の遊びが増加するようになる。なお、物を自分にもっていく遊びは、子どもも母親には求めず、母親もその遊びを行わない。

初期に多様な遊びによる母親の応答。後期に母親の受容的応答。物の機能に即した遊び象徴遊びで真の要求応答関係の成立。

b. 子ども自身の遊びと母親自身の遊び

6・7 か月では、子どもの消極的な遊びが急減し、物をとり扱う遊びが増加するなど子どもの遊びの積極性が高まるのに対応して、母親の応答は、子どもの遊びを注視するなど消極的になる。つまり、後期では母親が積極的に遊びに関与しないことによって、子どもが自由に多様なやり方で物と関わることを促しているのではない。

母親の、物のとり扱い、物の機能に即した遊び、象徴遊びによる応答は、2・3 か月からすでにみられ、前者の 2 つの遊びは 2・3、4・5 か月で多く、この月齢では子どもが十分に物を扱うことができないにもかかわらず、母親は物に直接関わる遊びで応答することが多い。これは、初期から母親が物を使って積極的に応答することによって、子どもの物への関心を高めようとしていることを示唆する。しかし子どもの物の機能に即した遊びが多くみられる 10・11 から 18・19 か月、および象徴遊びが多くみられる 20・21、22・23 か月で、母親のそれらの遊びによる応答が増加し、子どもの発達に対応した応答が行われている。子どもが高次の遊びを行うようになると、母親も同レベルの高次の遊びで応答し、子

表 6. Cini と Mres, Cini と Mini の比較

	Cini・LA [自分] の特徴	Mres・LA [自分]	Mres・V [自分]	Mres・LA [相手]
I	○ 2・3 か月がピーク ○ 6・7 か月で急減	○ 6・7 か月で急増し 6・7・10・11 か月が多い。→C の積極性 M の消極性増加	○ なし	○ 月齢差なし, 各月齢で最大→M が, 自分の動作の受容を求めることは一定
II	○ 4・5, 6・7 か月が多い ○ 6・7 か月がピーク	○ ほとんどなし	○ なし	○ ほとんどなし
III	○ 2・3 か月からある ○ 6・7 か月からどの月齢でも最大 ○ 8・9~14・15 か月で特に多い ○ 8・9 か月がピーク	○ 2・3, 4・5 か月が多い →M の先行	○ 少なく, 一貫した傾向なし	○ 2・3, 4・5 か月が多い →M の先行
IV	○ 2・3 か月からある ○ 12・13 か月で増加, 14・15 か月がピーク ○ 20・21 か月で少し減少	○ 2・3, 4・5 か月が多い →M の先行 ○ 10・11~18・19 か月が多い →C の増加に対応	○ 2・3 か月からみられるが, 20・21 か月から減少→C に対応	○ 2・3 か月で多い→M の先行 ○ 14・15~18・19 か月で多い→C の先行
V	○ 8・9 か月で初出 ○ 12・13 か月で漸増 ○ 20・21 か月から, IV レベルより多くなる	○ 2・3 か月からある→M の先行 ○ 20・21 か月から IV レベル上回る→C の増加に対応	○ 2・3 か月からある→初期は M の先行 ○ 20・21 か月から VI レベルより多くなる→C の増加に対応	○ 12・13 か月で初出, 22・23 か月で増加→C の先行
	Cini・LA [相手] の特徴			
I	○ どの月齢でも多い ○ 月齢に伴い増加	○ 6・7 か月で急増し, 6・7・10・11 か月で多い→C の増加に対応	○ ほとんどなし	
II	○ 6・7 か月で初出 ○ 全体に少ない	○ なし	○ ほとんどなし	
III	○ 6・7 か月で初出 ○ 12・13 か月から増加	○ 2・3, 4・5 か月が多い →M の先行	○ 少なく, 一貫した傾向なし	
IV	○ 8・9 か月で初出, 以後増加	○ 2・3, 4・5 か月が多い →M の先行 ○ 10・11~18・19 か月で再び多い →C の初出, 増加に対応	○ 2・3 か月からみられる→M の先行	
V	○ 16・17 か月初出 ○ 18・19 か月から IV レベルより多くなる ○ 20・21 か月で増加	○ 2・3 か月からある→M の先行 ○ 16・17 か月から増加, 20・21 か月で IV レベル上回る→C の初出, 増加に対応	○ 16・17 か月からやや増加傾向, 20・21, 22・23 か月で多い→C の初出, 増加に対応	

	Mrs・V [相手]	Mini・LA [自分]	Mini・V [自分]	Mini・LA [相手]	Mini・V [相手]
I	○ 2・3 か月で多い→Cのピークに対応	・ 6・7 か月から増加→Cの積極性、Mの消極性増加 ○ 2・3 か月のみわずかにあり→Mの先行	○ ほとんどなし	○ Cに比べ量多く、ゆるい減少→Cの積極性の過少評価 ○ 2・3 か月のみわずかにあり→Mの先行	○ ほとんどなし
II	○ 4・5～10・11 か月で多く 6・7 か月でピーク→Cのピークに対応	○ 2・3 か月のみわずかにあり→4・5～12・13 か月で多く 8・9 か月がピーク→Cに対応	○ ほとんどなし	○ 2・3 か月から1レベル について多い、月齢差なし→Mの先行、自発	○ ほとんどなし
III	○ 2・3～16・17 か月で多く 8・9 か月でピーク→Cのピークに対応	○ 2・3 か月から多い→4・5～12・13 か月で多く 8・9 か月がピーク→Cに対応	○ 2・3 か月から多い→Mの先行 ○ 20・21 か月から減少→Cに対応	○ 2・3 か月から1レベル について多い、月齢差なし→Mの先行、自発	○ 6・7～14・15 か月で多く、 8・9 か月がピーク→Cに対応
IV	○ 12・13～16・17 か月で多く、 14・15 か月でピーク→Cのピークに対応	○ 2・3 か月から多い→Mの先行 ○ 10・11 か月から第2の増加→Mの先行	○ 2・3 か月から多い→Mの先行 ○ 20・21 か月から減少→Cに対応	○ 2・3、4・5 か月で多い→Mの先行 ○ 14・15 か月でも増加→Cのピークに対応	○ 量的に C の増減と酷似し、 12・13～20・21 か月で多く、 14・15 か月がピーク→Cに対応
V	○ 4・5 か月で初出、以後増加→Mの先行 ○ 20・21 か月で VI レベルを上回り、 22・23 か月でピーク→Cのピークにはほぼ対応	○ 2・3 か月からある→Mの先行 ○ 22・23 か月から IV レベルを上回る→Cの先行	・ 2・3 か月からあり→Mの先行 ・ 20・21 か月から IV レベルを上回る→Cに対応	○ 4・5 か月で初出→Mの先行 ○ 22・23 か月で IV レベルを上回る→Cの先行	・ 2・3 か月からあり→Mの先行 ○ 20・21 か月で IV レベルを上回る→Cに対応
I		・ Cに比べゆるい増加→Mの積極性	○ ほとんどなし		
II		○ 2・3 か月のみわずかにあり→Mの自発	○ ほとんどなし		
III		○ 2・3 か月からあり、 4・5～12・13 か月で多く 8・9 か月がピーク→Mの先行	○ 2・3 か月からあり、 6・7、8・9 か月で多く 8・9 か月がピーク→Mの先行		
IV		○ 2・3 か月からあり→Mの先行 ○ 10・11 か月から第2の増加→Mの先行	○ 2・3 か月からあり→Mの先行 ○ 20・21 か月から減少→Mの自発		
V		○ 2・3 か月からみられる→Mの先行、 22・23 か月から IV レベルを上回る→Cの先行	○ 2・3 か月からあり→Mの先行、 20・21 か月から IV レベルを上回る→Cの先行		

表 7. Mini と

	Mini・LA [自分] の特徴	Cres・LA [自分]
I	○量少なく (15%以下) 6・7 か月から増加	○初期多く, 6・7 か月から減少傾向顕著→C の積極性, M の消極性増加
II	○2・3 か月のみわずかにあり	○6・7 か月ピーク, 20・21 か月まであり→C の自発
III	○2・3 か月からあり, 4・5~12・13 か月で多く, 8・9 か月がピーク	○2・3 か月からあるが10・11~16・17 か月が多い→M の先行
IV	○2・3, 4・5 か月で多い, 10・11~18・19 か月で再び多い	○2・3 か月からあるが12・13 か月で激増→M の先行
V	○2・3 か月からあり, 4・5 か月, 8・9 か月で増加, 22・23 か月で IV レベル上回る	○6・7 か月初出, 12・13 か月で増加, 20・21 か月で IV レベル上回る→初期M の先行, 後期C の先行
	Mini・LA [相手] の特徴	Cres・LA [自分]
I	○量多い, 月齢に伴い減少	○6・7 か月から減少傾向顕著→M が求めるより積極的
II	○2・3 か月のみわずかにあり	○6・7 か月ピーク, 20・21 か月まであり→C の自発
III	○2・3 か月から I レベルについて多く月齢に伴う傾向なし	○2・3 か月からあるが, 10・11~16・17 か月が多い→C の自発
IV	○2・3, 4・5 か月で多い, 14・15 か月でも多い	○2・3 か月からある→M に対応 ○12・13 か月から激増→C の先行
V	○4・5 か月で初出, 22・23 か月で IV レベル上回る	○6・7 か月初出→M の先行, 12・13 か月で増加 ○20・21 か月で IV レベル上回る→C の先行

もの遊びを促そうするのではない。なお, 子どもは自分に物をもっていく遊びも多いが, 母親はほとんど行わない。

子どもの開始行動における母親への要求意図の有無にかかわらず, 母親の応答パターンは一定。

c. 子ども自身の遊びと母親の求める子どもの遊び
子どもの遊びの積極性が高まるのに比べて, 母親は, 動作で子どもに一貫して一定量の受容を要求している。母親が物のとり扱い, 物の機能に即した遊びを求めることは 2・3, 4・5 か月で多い。この年齢では, 子どもは自分で物を使って遊ぶことはまだ十分にできないが, 母親は初期から, 子どもが物を使って応答することを要求し, 子どもの遊びの内容を高めようとしている。さらに, 物の機能に即した遊びを 14・15 から 18・19 か月

で, 象徴遊びを 22・23 か月で要求している。この月齢は, 子どものそれぞれの遊びが増加し始める月齢より遅れており, 子どもが高次の遊びを行うようになりそれが子ども自身の遊びとして定着すると, 母親はその遊びを子どもに要求するようになるのではない。

言語では, 子どもの I, II, III, IV, V レベルのそれぞれの遊びが多くみられる時期 (ピーク時期) に, 母親はその遊びレベルに対応した言語で応答することが多い。母親は遊び場面において, 子どもの遊びに直接関係した内容で子どもに話しかけることによって, 適切な言語環境をつくりだしているのではないだろうか。

初期を除いて母親は動作, 言語の両方で子どもの能力に適した要求, 記述を行い, 相互作用を継続。

Cres の 比 較

	Mini・V [自分] の特徴	Cres・LA [自分]	Cres・V [自分]
I	○ほとんどなし	○量多く、6・7か月から減少	○なし
II	○ほとんどなし	○6・7か月ピーク	○なし
III	○2・3か月からあり、6・7、8・9か月で多く、8・9か月がピーク	○2・3か月からあり、10・11～16・17か月で多い→Mの先行	○少ない
IV	○2・3か月からあり、20・21か月から減少	○2・3か月からあり、12・13か月で激増→Cの自発	○少ない
V	○2・3か月からあり、4・5、18・19か月で増加、20・21か月でIVレベル上回る	○6・7か月初出→Mの先行 ○12・13か月以後増加、20・21か月でIVレベル上回る→Mに対応	○16・17か月からVレベル増加 20・21か月でさらに増加→初期Mの先行、後期Mに対応
	Mini・V [相手] の特徴	Cres・LA [自分]	Cres・V [自分]
I	○ほとんどなし	○量多く6・7か月から減少→Cの自発	○なし
II	○ほとんどなし	○6・7か月ピーク→Cの自発	○なし
III	○6・7～14・15か月で多い、8・9か月ピーク	○2・3か月からあり、10・11～16・17か月で多い→Mの先行	○少ない
IV	○2・3か月からあり、12・13～20・21か月で多い	○2・3か月からあり、12・13か月で激増→Mに対応	○少ない
V	○2・3か月からあり、12・13、16・17月で増加、20・21か月でIVレベル上回る	○6・7か月初出→Mの先行 ○12・13か月以後増加、20・21か月でIVレベル上回る→Mに対応	○16・17か月からVレベル増加、20・21か月でさらに増加→初期Mの先行、後期Mに対応

2. Mini と Cres の関係: 母親の誘導が子どもの応答行動にどのように影響するか(表7参照)

a. 母親の求める子どもの遊びと子ども自身の遊び

母親が子どもの受容を求める程度より、子どもが応答で受容的な態度を示す程度は低く、子どもの積極性、自発性が示されている。物を自分にもっていく遊びも母親はほとんど求めないが、自発的に生ずる。物のとり扱いに関しては、母親は一定量の遊びを子どもに求めているが、子どもは母親の働きかけとは関係なく独自の発達傾向をみせている。しかし、母親が言語によってその遊びを要求することは、子どもの応答行動の多い時期に先行して、8・9か月でピークが生じており、母親は、子どもがその遊びをすることができるようになる前に、言語でその遊びを要求している。物の機能に即した遊びに関しては、動作では2・3、4・5か月の初期に母親が要求

することが多いが、12・13か月からは母親が要求しなくても子どもの方が自発的に行うことが増加している。しかし、言語では、物の機能に即した遊びに関する母親の言語の月齢変化は、初期から、子どもの応答における月齢変化と密接に対応しており、母親は、子どもが行える遊びについての言語化を行って、相互作用を開始している。そのような母親の行動は、特に後期で、子どもの言語理解の発達を反映しているとも考えられる。象徴遊びに関しては、初期は動作でも言語でも母親による遊びの開始の方が先行しているが、後期では、母親の言語による開始と、子どもの動作および言語による応答とが対応している。動作に関しては、母親の開始行動に先行して、子どもの象徴遊びの動作による応答が多くみられるようになる。

動作では、積極的、自発的な低次の遊びによる子どもの応答。母親の誘導による初期の、子どもの機能に即した遊び。言語では、子どもの能力に応じた母親の要求。後期の象徴遊びにおける要求—応答関係の成立。

b. 母親自身の遊びと子ども自身の遊び

母親の遊びの積極性が減少していくのに比べ、子どもの遊びは6・7か月を境に応答の積極性が高まってくる。物を自分にもっていく遊びは母親が行わないにもかかわらず、子どもが自発的に応答している。物の取り扱いに関しては、母親の動作による遊び、言語による遊びの両方が子どもの動作による応答に先行している。物の機能に即した遊びについても、母親の動作による遊びが先行している。しかし、言語に関しては、母親の言語による開始と子どもの動作による応答との間に関連はなかった。象徴遊びに関しても、初期は動作、言語の両方において母親による開始行動が先行している。後期では、母親の言語と、子どもの動作および言語とが対応しており、動作では、母親の動作と比べて子どもの応答の動作の方が先行している。子どもの言語の理解力が高まってくる時期に、母親のことばかけによって相互作用を開始するようになる。

動作による母親のモデルの提示。初期に、象徴遊びにおいて母親がモデルを提示。後期は、子どもの象徴遊びによる応答の増加。

3. Cini と Mini の関係：子どもの誘導が母親の誘導にどのように影響するか（表6参照）

a. 子どもの求める母親の遊びと母親自身の遊び

子どもの求める母親の受容の程度に比べ、母親は積極性が強い傾向がある。物を自分にもっていく遊びでは、子どもの要求に先行して2・3か月に母親が行っている。母親の物の取り扱い、物の機能に即した遊び、象徴遊びは、2・3か月からみられ、子どもの要求に先行している。物の取り扱い、物の機能に即した遊びについては、一貫して母親が先行している。象徴遊びの22・23か月における母親の増加傾向は、子どもの要求の増加傾向に比べて遅れており、子どもによる高次の遊びの要求が定着してから、母親はその高次の遊びによって相互作用を開始している。

全般に母親の積極的な誘導。後期は、物の機能に即した遊び、象徴遊びで子どもの発達を反映した誘導。

b. 子ども自身の遊びと母親自身の遊び

はじめに動作についてみると、母親が消極的な遊びをすることは、6・7か月以後、子どもの物を使った積極的な遊びの増加に伴ってふえており、母子の積極性がスムーズに交替している。また、母親の物の取り扱いとは2・3か月からあり、その後多くみられるようになるが、その傾向は子どもの傾向と一致している。物の機能に即した遊びも、2・3か月からあり、子どもの発達を反映しつつ、一貫して母親が子どもに先行している。象徴遊びも2・3か月からある。22・23か月で増加するが、それは子どもの20・21か月の増加に比べて遅れており、子どもの方が先行している。

次に、母親の言語による遊びと子どもの動作による遊びとをみると、物の取り扱いに関しては、母親と子どもの月齢変化が対応している。母親の物の機能に関する遊び、象徴遊びの言語は、2・3か月からすでにあり、子どもの動作に先行している。しかし、物の機能に関する遊びの20・21か月からの減少傾向、象徴遊びの20・21か月以後の増加傾向は、子どもの動作の傾向と一致している。母親の言語による遊びの開始行動は、2・3、4・5か月の初期では子どもの動作での遊びに先行して、高度な遊びの言語化が行われている。しかし、子どもの言語理解が発達する20・21か月以降、子どもの動作での遊びの月齢変化に対応した言語化が行われており、子どもの行える遊びレベルに適したことばかけを母親が積極的に行って、遊びを開始しようとしている。つまり、子ども自身の遊びの発達、言語理解の発達を反映して母親は言語によって相互作用を開始しようとするものが多くなると考えられる。

動作による高次の遊びにおいて子どもの積極的、自発的傾向の増加。後期に母親は子どもの発達に応じて言語による相互作用を開始。

c. 子ども自身の遊びと母親の求める子どもの遊び

動作では、子どもの積極性の増大に比べ、母親は消極的な注視などを求めることが多く、積極性が少ないが、それは、子どもに求める遊びレベルの許容範囲が広いことをも意味しよう。母親が、物を自分にもっていく遊びを求めることは初期に多く、子どもの遊びのピークより早い。物の取り扱いの遊びを要求することは2・3か月からみられ、一貫して多く、子どもの能力によらず母親は自発的に要求している。物の機能に関する遊び、象徴遊びを求めることも初期からみられる。物の機能に関する遊びを求めることは、14・15か月で増加しており、子どもの遊びの増加と対応している。また、象徴遊びを

求めることは 22・23 か月で増加しており、子どもの増加に比べて遅れている。象徴遊びの増加で子どもの方が先行する傾向は、母親自身の遊びの場合と同じであり、高次の遊びに関しては、子どもが可能になった後に、母親がその遊びによって相互作用を開始するようになる。

子どもの動作と母親の言語に関しては、初期に、相手の象徴遊びに関する母親の言語が子どもの動作に先行するほかは、物のとり扱い、物の機能に即した遊び、象徴遊びの言語が、それぞれにおいて子どもの動作の月齢変化に対応している。

ここで、母親の開始行動についてまとめると、母親は、自分自身の遊び、子どもに求める遊びの両側面において、初期に多様な遊びを行っており、遊びの中で、物への積極的なかわり方についてのモデルを、子どもに提示していると考えられる。

動作では母親による物のとり扱いの要求が主であり、初期は物の機能に即した遊び、象徴遊びで誘導。後期は子どもの発達に応じて誘導。言語では子どもの発達を尊重した誘導。

以上、遊びレベルを中心に母子の遊びの相互作用について考察してきたが、ここで相互作用における発達の变化をまとめると、次のようになる。初期 (2・3, 4・5 か月) は母親が子どもの能力にかかわらず積極的に物の機能に即した遊びで相互作用を展開しており、「母親誘導型機能遊び」といえる。

後期 (20・21, 22・23 か月) では子どもの遊びの能力、言語能力の発達に対応して、子どもが、特に象徴遊びによって遊びを展開しており、「子ども誘導型象徴遊び」が特徴的である。

B. 自分の遊びと相手に求める遊び

動作、言語における自分に関するものと相手に関するものとをそれぞれ比較し、母親の場合と子どもの場合との相違点を中心に以下にまとめる。

第1に、Ini 行動、Res 行動ともに動作では、子どもにおいては相手に関するものが月齢に伴って増加するのに対し、母親では減少傾向を示す。この減少傾向は、次のようにして求めた結果によりさらに明らかである。すなわち、遊び行動の分析では、ある遊びの動作は[自分]の遊び動作として必ず遊びレベルが決定されるが、[相手]の遊びレベルは、その同じ動作が同時に相手への要求となっている場合にのみ決定される。したがって、ある動作で[相手]だけの遊びレベルがチェックされることはない。そこで、Mini 行動の動作で[自分]にチェッ

クされた動作のすべてが相手への要求である場合を 100 として、相手への要求の割合をみる。その結果は、2・3 か月の 98% から 22・23 か月の 67% へと減少する。そこで、動作に関しては、母子が月齢に伴って逆の傾向を示し、子どもが相互作用の中で能動的な役割を果たすにつれ、母親は逆に受動的になってくると考えられる。

母子の相違点の第2は、言語におけるものである。Ini 行動、Res 行動ともに子どもの場合、自分に関する言語が相手に関する言語よりも多いのに対し、母親では逆に相手に関する言語の方が多くなっている。Mini では 12・13 か月以降にこの傾向がみられるが、Mrs では 2・3 か月からすでにこの傾向がある。

子どもの発声は、自分の遊び行動に密接に関係したものであり、相手に関する言語 (発声) は少ないのが特徴である。相手に関する言語には、相手への要求と、相手の行動の言語化の2つの場合が含まれている。子どもの言語発達の初期において、一般には相手への要求言語とよばれる言語が多くみられることは認められている。ところが、我々のデータでは相手に関する言語が非常に少ない。分析の対象となった遊びの場面では、伝達の相手となる母親は子どもの遊びに注目しており、また遊びに用いられる物は目の前に置かれているため、物に関する要求は直接に動作によって示すことが可能である。したがって、相手への要求の言語が子どもで少ないと考えることができる。また、相手の行動の言語化についても、観察した月齢の子どもでは、十分に行なえるとは考えることができない。行動にはヴァリエティが多く、それを表現するに足る語彙量を持っていないこと、そして相手の内的状態の記述をするには相手の視点に立つという視点の転換が必要であるが、この頃の子どもの自己中心的認知から考えて視点の転換が困難であること、がその理由である。一方、子ども自身に関する言及が多くなることの説明としては、次のようなことが考えられよう。言語が可能な高月齢の子どもの自分に関する遊びレベルをみると、動作ではⅢレベル、Ⅳレベルが大部分を占めるが、言語では、特に Cini で、むしろ高次の象徴遊びの言語であるⅤレベルから出現し、月齢とともにより低次のレベルを含むようにはなるもののその中心は常にⅤレベルである。このように言語の遊びレベルが動作とずれていることは、この頃の子どもが一般に言語を、物と密着した要求や機能の提示の動作とともに用いるというよりも、むしろ、象徴遊びといった内的イメージの表出として用いていることを示すものと考えられ、この結果、相手に関する言語よりも自分に関する言語の方が特に象

徴遊びの言語で多くなるといえよう。

このような子どもの言語とは逆に、母親では、2・3 か月の早期から子どもの遊びに応ずるときに子どもの遊びの言語化を多く行っている。さらに、12・13 か月以降は、子どもの言語能力の発達に伴い、言語による遊びの促しによって相互作用を開始することが行われるようになる。また、既に述べたように、子どもの動作における遊びレベルのピーク月齢は、Ini 行動、Res 行動ともに、月齢に伴って I レベルから順に高次になっていくが、これに応じて、母親の言語での応答も、I レベルから高次になっていく傾向があり、各遊びレベルのピーク月齢もほぼ子どもと対応している。つまり、母親は 2・3 か月から子どもの遊びの動作の言語化を忠実にやって子どもに応じているといえる。

C. 遊び行動における動作・言語と象徴遊び

遊びに関する動作と言語の量を比較すると Cini 行動、Cres 行動、Mini 行動、Mres 行動のいずれにおいても動作の方が言語より多かった。ただし、自分の遊びと相手に求める遊びに分けてみると、Mres 行動では 6・7 か月以後、Mini 行動では 20・21 か月以後、相手に求める遊びに関しては、言語が動作よりも多くなっている。

このように遊び全体をみると、一般には遊びに関する言語の量は遊びに関する動作の量より少ないのであるが、象徴遊びに限ってみると、象徴遊びに関する言語が遊び全体に関する言語に占める割合は、象徴遊びに関する動作が遊び全体に関する動作に占める割合よりも大きい。これは母親のみでなく、遊びに関する言語が出現したあとの子どもにおいても同様である。また、このように象徴遊びの言語が相対的に多いだけではなく、上記の相手に遊びを求める場合の Mres 行動の 6・7 か月以降、Mini 行動の 20・21 か月以降を含めて、母親では、象徴遊びの言語の絶対量が象徴遊びの動作より多い月齢がかなりみられる。

この結果は、象徴遊びが言語なしに行われることが稀であることを示していると考えられよう。もちろん、言語出現以前の子どもにも象徴遊びがみられる。しかし発達初期の言語を伴わない、動作のみによる子どもの象徴遊びは、遊びのパートナーである母親の言語によって補われていると考えるのが妥当であろう。

また、遊びに関する子どもの言語が初めてみられる時期には、まず象徴遊びに伴う言語が出現する傾向が示された。これは、その時期に増加する象徴遊びの動作に、言語がなんらかの形で結びついていることを示すもので

あろう。その結びつきは次のように説明されよう。すでに述べたように母親の象徴遊びには言語を伴うことが多い。また、我々の対象とした生後 23 か月あたりまでに出現する象徴遊びは、母親に関しても子どもにおいても、その種類が非常に限られており、どの母子ペアにおいても幾つかのヴァリエーションしかみられないことが観察から認められている。つまり慣習的・儀式的とさえいえるような、決まった動作が母子間でくり返される。この動作に伴う母親の言語が、動作と同様に限られたレパートリーのヴァリエーションとなると考えるのは容易である。子どもは、言語と動作の結びついた、はじめは両者が未分化である、ひとまとまりの行動として象徴遊びのボタンを次第に習得していくのであろう。そして、感覚運動期の最終段階を経て、言語の習得がある程度進んだ段階になると、最も高度な象徴機能をもつ言語が象徴遊びの象徴機能を補うようになると考えられる。以上に述べたことを明確に示すためには、母子のペアで用いられている象徴遊びに関する語彙・言語表現の実際を詳細にみる必要があるとなろう。

以上みたように、言語の象徴機能の側面と強く結びついた語彙・言語表現の習得は、象徴遊びを通して、遊びそのものによって促されることが考えられる。他方、我々が本研究で遊びに直接関係のない言語 (V [その他]) に分類したような、コミュニケーション機能をより強くもつ語彙・言語表現も、遊び場面を含む日常の様々な場面の母子相互作用の中で習得されると予想され、その過程を明らかにするのは我々の縦断観察研究の課題のひとつである。

D. 遊びユニットの変化と機能レベル、遊びレベルとの関連

遊びユニットの結果において、大きく 3 つの時期に分けられた (Ⅲ. A. 1. 参照)。すなわち、2・3 から 6・7 か月、8・9 から 16・17 か月、18・19 から 22・23 か月である。第 2 の 8・9 から 16・17 か月では、遊びユニット数は多いがひとつの遊びユニットを構成する相互作用ユニット数は少ないという特徴がみられ、この前後の月齢では逆に、遊びユニット数は少ないがひとつの遊びユニットを構成する相互作用ユニット数は多いという特徴があった。以下、それぞれの時期の機能レベルと遊びレベルの結果から遊びユニットの増減について考えてみよう。

第 1 の時期の 2・3 から 6・7 か月では、母親が相互作用の大半を開始し、玩具提示が極めて多く、強い働きかけの、特定行動要求もやや多くみられる。このような

母親の相互作用開始行動に対する子どもの応答は、受動的受容や無視・拒否などの消極的なものが主である。この時期にみられる遊びレベルの特徴としては、母親のIni行動における自分の動作では、物の機能に即した遊びのIVレベル、次いで物を取り扱うIIIレベルが多く、相手に対する動作による要求では、消極的遊びのIレベルが極めて多い。これに対する子どものRes行動の遊びレベルは、自分の動作では消極的遊びのIレベルが多く、相手への動作による要求や遊びに関係した発声はない。そこで、この時期の遊びにおける玩具の選択や遊びの内容を決定する主導権は母親にあると考えられ、先の遊びユニットの大きさは、主として母親の行動によって決められたものといえる。この2・3から6・7か月までの時期では、母子の遊びのパターンとしては、母親が物を提示したり、物の機能を一方的に示したりし、これに子どもが注目することによって遊びの相互作用が行われている。場合によっては、子どもが全く注意を向けずに終わることも多い。そこで、母親が特定の玩具を長く用い、このような「提示→注視/無視」パターンを反復させるために、一セッション中の遊びユニット数が少なく、その中に含まれる相互作用ユニット数が増えるものと考えられる。

第2の時期、8・9から16・17か月では、子どもが相互作用の開始者となる割合も増し、また、長く続く相互作用の開始者となることも多くなっている。機能レベルでは、Ciniでレベルbの提示が増加し、働きかけ要求のレベルcも幾分ふえてくるが、一人遊びのレベルaは減少してくる。Cres行動でも受動的なレベルxが減り、より能動的なレベルy, zが増加してくる。このような機能レベルでの能動性の強まりとともに、遊びレベルでも、Ciniの動作では消極的なIレベルが減り、III, IVレベルが増加してくる。また、Cini行動の機能レベルでのレベルb, cの増加を反映して、遊びレベルでも動作による相手への要求で、I, IIIレベルの増加がみられる。発声は、喃語以外の注意喚起などがみられるようになるが、遊びに関する言語はまだ未熟である。この月齢での子どもの特徴は、相互作用において動作による能動性が増すことである。遊びの主導権はまだ母親に大きく委ねられてはいるが、子どもが新たに玩具や遊びを選択する可能性も増し、これによって遊びのユニットの切れ目が決定することも多くなると考えられる。このような子どもの変化に対して母親は、応答の機能レベルでは能動的受容のレベルyが、解釈・展開のレベルzを上まわるようになり、子どもの意図に沿って受容していきこうとする傾向を増す。また、遊びレベルでも、特に言語によ

る応答で、子どもの遊びの動作レベルに対応した言語化が多くみられている。以上のことから、この月齢における遊びの相互作用の中での子どもの主導性の増大が、一セッション中の遊びユニット数の増加、ひとつの遊びユニットに含まれる相互作用ユニットの減少をもたらすものと思われる。すなわち、この時期の子どもでは、物を幾つか組合せたり、構造化した遊びをしたりする能力はまだもたないため、個々の玩具の機能に依存した活動を行うことによって遊びを行っていると考えられる。したがって、単純な物依存的遊びを行うために、遊びそのものの多様性は増すものの、未だ特定の目的、又はテーマをもった遊びは十分に出現していないと思われる。

第3の時期、18・19から22・23か月では、子どもが母親と同程度に相互作用の開始にかかわることができるようになる。また、長く続く相互作用の開始者となることも著しく多くなってくる。機能レベルをみると、Ciniでは、レベルbの提示とともに特定行動要求のレベルdも増加し、Cresでも能動的受容のレベルyが増加する。Ciniでのレベルb, Cresでのレベルyは、母親と同程度の割合でみられるようになる。これに対する母親は、Ini行動では特定行動要求のレベルdの増加が顕著である。遊びレベルでは、子どもの動作での要求が、Ini行動、Res行動ともに増加し、機能レベルでの能動性を反映している。この時期は、言語がかなり増加し、特に象徴遊びの言語が多くなっていることが注目される。また、動作でも象徴遊びのVレベルの増加がみられる。母親もまた、言語ではIni, Res行動にかかわらず、また[自分][相手]にかかわらず象徴遊びレベルが増加している。動作では、特に応答の自分の動作で象徴遊びの増加がみられる。遊びの相互作用が、今までの動作中心のものから、動作に言語を伴ったものへと移行し、内容としては特に象徴遊びが中心となり始めていることが、この時期の特徴である。母親、子ども共に相互作用に強く関与し、相手への要求においても特定の行動を求めるようになっていく。このことは、遊びが漠然とした、目的のないものから、特定の目的又はテーマのもとに展開するものになったことを示唆するものであろう。すなわち遊び場面の中で、母子が言語を媒介として特定のイメージを共有し、そのイメージのもとに構造化された遊びを行うことができるようになってくると考えられる。したがって、この時期では、遊びユニットの減少とひとつの遊びユニット中の相互作用の増加が生ずる。それは、量的には低月齢と同様の傾向であるが、その中に含まれる遊びの質においては、全く異なったものといえる。

V. 今後の課題

本論文では、母子の遊びの開始行動、応答行動、又は動作、言語別に、各月齢で出現した遊びレベルの割合の変化を主として扱い、象徴遊びの出現に至る遊びレベルの変化が、母子の相互作用の性質の変化とどのようなかわりをもっているかについて幾つかの点が示された。要約すれば次のようになる。すなわち、初期では全般に母親が先行し、後期では、特に20・21か月以降、象徴遊びが子どもに多くなると、言語を用いた象徴遊びでの相互作用が母子の間で可能となり、真の意味での遊びの相互作用が成り立ちうる。また、母親の側からは、子どもの発達に合わせて遊びを母親主導型から子ども主導型へと変えていく。

全体量の比較の中で示された上記の点については、さらに、ひとつひとつの相互作用の中で検討していくことが必要であろう。今後は、遊びのひとつひとつの相互作用における開始、応答の遊びレベル間の対応や、遊びレベルと機能レベルとの対応をとりあげて検討する。また、象徴遊びの言語の内容分析を行うことにより、本論文ではまだ不十分であった、象徴遊びと象徴機能との関連についての考察をさらに進めていく予定である。

文 献

- Bates, E (1979) *The Emergence of Symbols*. Academic Press.
- Inhelder, B., Lézine, I., Sinclair, H. et Stambak, M. (1972) *Les débuts de la fonction symbolique*. Archives de psychologie. 184-243.
- Nicolich, L. (1975) *A longitudinal study of representational play in relation to spontaneous imitation and development of multiword utterances: Final report*. ERIC Document-PS007854.
- Piaget, J. (1946) *La formation du symbol chez l'enfant*. Delachaux et Niestlé.
- Piaget, J. et Inhelder, B. (1966) *La psychologie de l'enfant*. P.U.F.
- 辰野俊子・斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子 (1980) 言語行動の発達 (II) 玩具を媒介とした母子相互作用. 東京大学教育学部紀要 第19巻 35-74.

1) 方法は前報、辰野他 (1980) に準ずる。詳細は前報を参照のこと。

付記 1. 肥田野直教授には、本研究をすすめるにあたり御指導をいただきました。記して感謝の意を表します。

付記 2. この研究のために非常に多くの方々のお世話になりました。関係の方々、とりわけ進んで協力をしてくださった被験児のお母様方と御家族の皆様に、この機会にあらためて御礼申し上げます。

付記 3. 本研究の一部は昭和 52・53・54 年度及び昭和 55 年度文部省科学研究費 (代表者 肥田野直) の補助を受けた。